
夏休み

平維茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏休み

【Nコード】

N2840T

【作者名】

平維茂

【あらすじ】

昭和33年の7月下旬、小学生5年の岩崎修一は大阪から郷里の高知まで

一人旅をする為に山陽本線、岡山經由宇野行き三等車両の固い座席に座つ

ていた。約1ヶ月の間、自然に恵まれた田舎で貴重な夏休みの体験をす

るのでした。振り返ると楽しく、そして誰にも有る幼き頃のせつない思い

出

·
·
·
·
·
·
·
·
·

一、出発

昭和三十三年七月下旬、小学五年の岩崎修一は大阪発、山陽本線、岡山経

由宇野行き二等車両の固い座席に座っていた。

「修一、あんた一人で大丈夫か？」

母が車窓越しに心配そうに修一を見ていた。

「お母ちゃん。大丈夫やて」

「本当に大丈夫か？ちゃんと乗換え出来るんか？」

ここに来て母はまだ心配していた。

宇野から宇高連絡線に乗換え高松まで。高松からは土讃線で後免まで、更に

土佐電気鉄道の安芸線に乗り換え終点の安芸までの長旅となる。乗り換えが

多く、両親は修一を一人で帰省させる事に反対していた。しかし、修一は今

年の夏休みも自然の豊かな田舎で過ごしたい思が強く両親を必死に説得した。

「あつちに行ってもちゃんと毎日勉強するんやで。夏休みの宿題も忘れたら

あかんで。今年はお母ちゃんが一緒に帰えれんけど、修一が代わりに親戚

の皆に宜しゅう言つんやで。お祖父ちゃん、お祖母ちゃんに甘えてばかりい
たらあかんで」

「分かつてるがな。煩いなあ」

「お祖父ちゃんには、修一が汽車に乗ったからって、後で電報打つとくさかい」

母の心配をよそに修一は嬉しくて仕方なく、母の言葉は右の耳から左の耳に完全に抜けていた。既に頭の中は幼友達の事、川で泳ぐ事、釣りを
する事、
蝉取をする事、色々な計画で一杯であった。

発車のベルが鳴り汽車は汽笛を数回鳴らすと、動輪を力強く回し煙を吐きな
がらホームを滑り出した。修一の高鳴る気持ちとは逆に母は心配そ
うに修一
の乗った汽車が見えなくなるまでホームから見送っていた。

汽車は山陽本線をひたすら西に向け走り、岡山駅から宇野線に入り、
宇野駅

で宇高連絡船に乗換えた。連絡線が高松港に着く頃には乗客はデッキ
キ近くに
集まり下船の準備を始めていた。修一には何時もの見慣れた光景で
あったが
船のデッキに出るにはかなりの勇気と決断を要した。デッキから遙
か下の波

しぶきを見ると海に吸い込まれそうに思え、更にはデッキから細いタラップを渡り棧橋に辿り着くまでの間、海に落ちるのではとの恐怖感に駆られた。船室にはデッキに出るのが怖くて母親に縋って泣いている幼い子供がいた。修一はそれを見て以前の自分のように思え、些か反省はしたが、出来る事なら目を閉じてタラップを渡る事が出来ればと思った。

連絡船は穏やかな瀬戸内海を航行し高松港に近づくにつれ右に鬼ヶ島、左に源平の合戦で有名な屋島、前方には防波堤に囲まれた高松港が見えてきた。船が高松港の岸壁に接岸しタラップが降ろされると汽車に乗換える乗客達は一齐に先を争って目的のホーム目掛けて走った。修一は出来るだけタラップの真ん中を通るようにして下船しホームに停車している高知行きの汽車目掛け一目散に駆け出し三等車両の進行方向窓際の席に座ることが出来た。しかし、お盆の帰省には時期的に早く、車内を見渡すと空席も目立ち、べつに走る必要が無かったと後悔した。

車内で聞こえる乗客の会話の中には懐かしい言葉も聞こえてきた。

「もう直ぐや」

修一の頭の中は田舎での遊びの事で一杯であった。

高松駅を汽車が出発して暫くすると向かいに座っていた小母さんが修一に話しかけた。

「僕、ひとりかね」

「はい。一人です。夏休みで田舎に帰るところです」

「そう。僕の田舎は何処なが？」

「安芸です」

「安芸なが。ほいたら僕は後免で乗換えるがやね」

「はい。後免で乗換えます」

「安芸にはどなたかがおいでなが」

「お祖父ちゃんとお祖母ちゃんが居ます」

「そうかねえ。お孫さんの帰りを楽しみに待ちゆうがやね。ええことよね。」

おばちゃんはこれから須崎までいぬるところなが。ほいで、僕は何処から来たなが？」

「大阪です」

「大阪からかね。まあ、僕はひつとりで大阪から安芸まで帰れるきにえらい

もんよ。ほいで何年生かね？」

「五年生です」

「五年生なが。大したもんよねえ。ほいたら、せいだい夏休みを田舎で楽し

んだらえいわや。土佐はえい処やきにね」

「はい」

「僕、お腹すいちゃあせんかね。これ食べたらええきに」

そう言って、小母さんは修一にミカンとゆで卵をくれた。

「小母さん。ありがとう」

修一がさっそく食べ始めるよ、

「おいしいかね」

「はい」

「それは良かったよ」

小母さんは笑みを浮かべて満足そうな顔をした。

高松駅から高知の後免駅までは数時間の汽車の旅で力強く回る汽車の動輪が

線路の継ぎ目を通過する音と車体から伝わってくる振動が修一の郷愁の思いを一層駆り立てた。汽車は讃岐平野を走り抜け、吉野川沿いの曲がりくねつ

た線路を走り、吉野川とその溪谷を右に左にと交互に眺めながら、幾つもの

トンネルを潜り、鉄橋を渡り、四国山脈を越え、小歩危、大歩危を通り土佐

山田駅の手前で高知平野に入った。車窓から遙か下に見える溪谷の流れ、青々

と連なる四国の山々、澄み切った青空が修一に故郷を感じさせた。列車がトンネルに入る前に「間もなくこの列車はトンネルに入ります。窓を

お閉め下さい」と車掌が繰り返し車内放送し、たまに窓を閉め忘れたりするとトンネルに入った途端に黒い煙が車窓から入り顔に煤がこびり付いたりし

た。修一は何故か蒸気機関車の吐く石炭の煙の臭いが好きだった。

土佐長岡駅を過ぎると次はいよいよ最後の乗換駅の後免。

「僕。次が後免やね」

小母さんの顔が少し寂しそうに見えた。

「はい。次で降ります」

「後免にはどなたかが迎えに来てくれちゅうがかね？」

「安芸まで一人で行きます」

「そうなが？一人で乗り換えは出来るがかね？」

小母さんは少し心配そうな顔をした。

「はい。大丈夫です」

と言ったものの修一にも少し不安が有った。

「えらいねえ。気を付けて行きよ」

「はい。小母さん、有難う」

小母さんは汽車の窓から手を振って修一を見送ってくれた。

土佐電気鉄道・安芸線は後免駅から終点の安芸駅まで二十六・八キロの路線

で起終点駅を合わせると二十一駅有り、その内の十ヶ所が無人駅で車体は関

西の大手私鉄から払い下げの旧式のモハ1000形の木造車で海岸沿いに安

芸駅まで各駅停車の旅となる。右には土佐湾、その先には雄大な太平洋。左

は田んぼと畑が広がり、その向こうには山々が連なり、都会では決して味わ

う事が出来ない自然と長閑な田舎の風景が広がっていた。駅から次の駅が見

える処も多く、終点の安芸駅までノンビリとした走行で、単線の為途中の

駅で後免方面の電車を待つ事も度々で、早く安芸に着きたい思いの

修一にも

どかしさを感じさせた。赤野、そして穴内あなないを過ぎ、車掌が「次は終
点安芸駅」

と車内放送をすると、「やっと着くんや」と思い、修一は嬉しくな
り気持ちがい
はよかった。

二、田舎の匂い

電車が安芸駅のホームに到着し左の扉が開くと乗客は慌てる事も無く、ま

た焦る事も無く降りて行った。古びた木造造りの長閑な駅舎でホームに降り

ると懐かしい田舎の匂いが修一の鼻の奥に漂ってきた。駅舎の南の浜から漂

つて来る潮の香り、近くの醸造所から漂ってくるのか酔のような匂い。修一

の脳裏に焼き付いた忘れる事のない田舎の匂い。北側の山からは修一の帰省

を歓迎するかのように蝉の鳴き声が聞こえていた。

改札口の向こうでは祖父が修一の出てくるのを心待ちにしていた。

修一は祖

父を見つけ照れくさそうに手を振り、祖父もそれに応えて笑みを浮かべなが

ら修一を招き寄せるように手を振った。

「修ちゃん。よう来た、よう来た。今年の夏休みは帰って来れんか
と思ひよ

ったが、まっこと良かったぜよ」

祖父は満面に笑みを浮かべ修一を出迎えた。

「うん。今年の夏休みも絶対に帰るで決めてたんや」

「まっこと良かったよ。今年も裏の畑にトウキビをどっさり植えち

やうきに、
毎日もいで食べたならええわや」

祖父は修一が帰って来る時期に合わせ毎年裏の畑にトウモロコシを植えてく
れていた。修一もその採り立てのトウモロコシを食べるのを楽しみ
にしてい
た。

「荷物はこれだけかね？」

小さなトランクとリックサックだけだった。

「うん。ほかの荷物はお父ちゃんがチツキで送ってくれた」

「ほいたら、お祖父ちゃんが後で取りにきちよかあ」

修一は一人娘の初孫で可愛くて仕方がなく、生まれてから一時期、
祖父母の

家で預かっていた事もあり、修一が大阪の両親の元に戻ってからは、
修一の

帰省を心待ちにしていた。祖父は何時もの様にリヤカーを繋いだ自
転車で迎
えに来ていた。

「修ちゃんはまた少し大きゆうなりやせぎったか？」

「うん。去年から少し背が伸びた」

修一はリヤカーに乗り後ろ向きに座った。

「ほいたら、これから行くき、掴つかまちよりよ」

祖父はそう言っつてニコニコしながら自転車をこぎ、本通りを東の方へと走らせた。

本通りと言っつても自動車が二台やつとすれ違つ事が出来る程の幅しかなく、もつとも自動車も少なく、往来するのは浜で砂利を採取する荷馬車くらいで、通りのいたる処にその荷馬車を曳く馬の糞が落ちていた。その糞が暫くすると乾燥し藁状になると町の子供達は足が速くなると言っつてよく踏んづけたりした。修一も「馬のように早くなれ」と言いながら以前はよく踏んづけたりもした。

リヤカーに乗つていと通りを行き交う人に見られていようで、修一は何時も何か恥ずかしさを感じた。後向きに座つていと通り過ぎて行く家具屋、小さな郵便局、警察署、散髪屋、魚屋、食堂等の懐かしい町並みが見えた。造り酒屋の前に差し掛かつたところで一人の小母さんが祖父を見付け挨拶をした。

「岩崎さん、こんにちは。毎日暑いですね」

「ああ、こんにちは。暑いことよ」

「ありや、後ろに乗っちゅうのは誰かね？」

「孫ぜよ。いんま大阪から戻^もってきたきに駅まで迎えに行っちよつたがよ」

「お孫さんかね。そら良^ええことよ。楽しみなこと」

小母さんは修一の顔を見なが羨ましそうに言った。

「毎年こうやって戻^もんて来てくれますらあよ」

「岩崎さんはええ事よ。うちんくの東京の孫らは、ひとつちやもんて来んぜ」

「よ」

「そら寂しゅうていかなね。けんど、その内に戻^もつて来てくれらあよ」

「そうならええけんど。たまには孫の顔も見たいけんど、何時になる事やら」

祖父がその小母さんとの話しを終え再び自転車を漕ぎ始めた。暫く走り、通

りの南側角に有るパン屋の和食屋分店^{わしょくや}を右に曲がると、パンを焼く香ばしい

匂いがしてきた。その通りを二十メートル程行った東側に祖父母の家が有る。

寺尾耳鼻科医院の前の黒い板塀に囲まれた門構えの家で、門を入ると直ぐ南

側にイチジクの木が一本植えてあり、その傍には物置小屋、北側に内玄関の

上がり框かまちが有り、それを上がると奥に囲炉裏のある六畳間、西側に三畳間と

その北側奥は土間になっていて黒く煤けた竈があり、囲炉裏の有る部屋の東

側には八畳間が有った。八畳間の廊下を隔てた南側は六坪程の庭で、真ん中

には一本の大きな桃の木が植えてあった。八畳間の南側の廊下の奥の突き当

たりを右に行くと汲取り式の便所が有り、便所へ繋がる廊下は昭和二十一年

の南海地震の所為で今でも板は波を打った様な状態になっていた。便所には

電灯も無く、昼間でも薄暗く、修一はその便所に行くのが大の苦手で、用を

足している間、下の暗い肥溜めからお化けか幽霊でも出てきそうな気がして

怖くて仕方がなかった。夜は尚更で、何時も祖父か祖母に懐中電灯を持って

付いて来てもらっていた。時々は廊下から庭に向かって用を足す事も有った。

「ミミズにオシッコかけられんぞね。オシッコかけたらおちんちんが腫はれるぞね」

祖母が修一によく言ったものでした。何時か弟のが腫れ上がった事

が有り、

祖母が庭のミミズを水洗いしたら腫れが治まった事が有った。

「照子！修ちゃんが戻^もって来たぜよ」

祖父が土間に居る祖母に声をかけた。

祖母は割烹着の前で手を拭きながら玄関先に出てきた。

「修ちゃん、よう来たね。ひとりで大丈夫やったかね？」

祖母も修一を見てとても嬉しそうな顔をした。

「うん。大丈夫や」

「えらいもんよ。もう五年やきにね。お祖父ちゃんも修ちゃんの来るがを、

毎日、毎日、心待ちにしよったきに。待ちかねちよったぞね」

修一は照れくさそうに首を少し縦に振った。

「お腹は空^すいちやあせんかよ」

「まだ、空いてへん」

「ほいたら後で晩御飯にするきに。早^はよう荷物を置いて裏の井戸で
手と顔を

洗^{すす}うてきいや」

修一は土間を通り東側の風呂場の横の井戸端に行った。

手押しポンプのハンドルを数回押すと水口から冷たい水が勢い良く出てアル
マイトの洗面器がすぐに一杯になった。この井戸水は夏場、冷たくて美味く、
修一はこの井戸水を飲むのが好きであった。

祖父は自転車とリヤカーを玄関の隅の物置小屋に仕舞い、祖母は竈で夕食の支度を始めた。この物置小屋は広くて炭俵の保管にも使われ、修一がもつと
幼い頃、悪戯をした時など祖母に叱られ閉じ込められた事があった。閉じ込められて大声で泣いていると、何時も向かいの野町のお婆さんが助けに来てくれた。

「岩崎さん。大事よ。修ちゃんが泣きゆうが、どうした事ぞね」

「修一が悪さをしたきに閉じ込めたがよね」

「まあまあ、かわいそうに。修ちゃん。小母さんが代わりにあなたのお祖母さんに謝つちよくきに、もう絶対に悪さはせられんぞね」

そうして、修一は物置小屋から出してもらった。

「今日は、修ちゃんの好きな魚をこつてきたきに、どつさり食べよ」

祖母が土間から井戸端にいる修一にそう言った時、土間の西の勝手

口の引き

戸が突然開いて、「おばさんよ」と声がして向いの家の野町武が入ってきた。

「武ちゃんかね。どうしたが」

「家うちんくのお祖母さんが・・・」

と武が言い掛けて井戸端に修一が居るのに気が付いた。

「修ちゃんやいか、何時もんてきたが」

武は修一を見つけて嬉しそうに言った。

「今日もんてきた」

修一も何時の間にか土佐弁で答えていた。

「修ちゃん。今度は何時まで居るが」

「うん。お盆過ぎまで居る予定や」

「ほいたらよお、また一緒に遊べるにや」

「うん」

修一は武と遊ぶのを楽しみにしていた。野町武は修一より一つ年上で帰省す

る度に、何時も一緒に釣りに行ったり蝉取りに行ったりしていた。

武の家族

は両親と母方の曾祖母、祖母と武の七つ年上の姉との六人家族で父

親は運送

会社で木材を運ぶ長距離トラックの運転手で何時も不在で、母親も仕事で日

中は家に居る事が殆ど無く武の面倒は祖母がみていた。

「修ちゃん、これやるき」

武が手に持っていた手作りの船の模型を修一に差し出した。

「ええわ」

「かまんき、もろうちよきや」

修一は何度も断ったが、武は強引に修一の手を持たせ、そして、

「明日、蝉取りに行くき」

と言って帰って行った。

「武ちゃん、何の用やったろうね？」

祖母がポツリと言った。

三、地曳網とミツチャン

翌朝、八畳間の障子が薄っすらと明るくなり始め、牛乳配達の自転車の荷

台で牛乳瓶が触れ合うカチャカチャ、カチャカチャという音が聞こえて来た。

最初は微かに聞こえ、静かになり、また聞こえ、次第にその音が近くなり、

遠くへ離れて行った。風呂場の横にある鶏小屋からは鶏の鳴声が聞こえ、竈

では既に祖母が薪で火を熾し、食事の支度を始めていた。修一は蚊帳から出

て目を擦りながら土間まで行くと、

「修ちゃん。起きたかよ。えろっ早いが」

「お祖母ちゃん、おはよう」

「おねしょせざったかよ」

「そんなん、してへん」

修一は小学校三年頃までは時々はしていた。

「そんなら井戸で顔を洗^あろおてきいや。顔を洗^あろおたら、裏の畑でトウキビ

もいで来たたらええきに。七輪に炭を熾しちゃうよ」

井戸端に出ると外気はまだひんやりとして、空気も澄んでとても気

持ちの良

い朝で、井戸の冷たい水で顔を洗うと一気に眼が覚めた。裏の畑に行く

と隣で飼っている豚の鳴き声も聞こえ、トウモロコシの葉には朝露が沢山付いて

いた。修一はトウモロコシを一本？いで風呂場の横の縁台の上に座り七輪の

上で焼いた。田舎の畑の穫れたてのトウモロコシほど美味しいものはないと修

一は思っている。大阪で母に頼んで時々トウモロコシを市場で買って貰って

も田舎の採れたてのトウモロコシと全く味が違い何時もガツカリした。

「浜へ行てくるき」

修一はトウモロコシを食べながら祖母にそう言って勝手口から飛び出した。

「もうすぐ、朝御飯やきに、早ようにもんてきいよ」

修一の後ろで祖母の声が聞こえた。

「地引網見たら直ぐに帰って来る」

家から少し歩くと右側には鍛冶屋があり、昼間は何時も小父さんが刃物を打っていた。更に歩いて行くと右側に修一の肩の高さ位の中学校の古びたコン

クリートの塀が続き、塀が途切れた道の向こう側が防波堤で、その

道を右に
曲がるとすぐ左に防波堤の切れ目が有り、そこから浜に下りて行っ
た。波打
ち際は粒の大きな砂利が小高い丘のようになり東西に延びている。
潮の香り
が強烈に鼻を突き、絶え間なく打ち寄せる波の音が郷里に帰ってき
た実感を
修一に強く感じさせた。

浜では既に地引網が始まり、浜の中程で四、五人の漁師達がロクロ
でロープ
を巻きながら網を引き、波打ち際には漁師とその家族や子供達が楽
しそうに
話しをしながら網をたぐり寄せている。修一が側で見ていると、一
人の漁師
が修一に声をかけた。

「おまんも一緒に引くかよ」

修一は喜んで皆に加わり網を引き始めた。次第に網が絞られ沢山の
魚が固ま
りになり波打ち際まで上がって来た。鯆、ボラ、鯖に混じり名前の
分からな
い魚も入っていて、中には小さな鮫も交じっていた。漁師達は手分
けして獲
れた魚を手際よくト口箱に詰め、詰め終わった順から肩に担いで運
んで行っ
た。

「おまんも好きな魚おまんを持っていんだらええき。そこに新聞紙が有る

る。それ
に包みや」

先程の漁師が修一に言った。

「おんちゃん、有難う」

修一は小さな鰻を数尾貰い、浜を駆け上がり急いで家に戻って行った。

この浜は台風の時など防波堤の直ぐ手前迄大きな波が打ち寄せ、その大きな
波を見るのも修一には楽しみの一つであった。

浜から戻ると和食屋分店の横では既にラジオ体操が始まり、近所の
子供達に
混じり武もいた。その中には、家の南隣りの竹崎さんの次女のミッ
チャンの
姿も有った。

「修ちゃん、帰って来たがやね。さっき武ちゃんが言いよった」

ミツチャンが修一に声を掛けると、

「うん」

と言ってから、修一は何故か顔が火照るのを覚えた。ミツチャンは
修一より
四つ年上のお姉さんで、以前は帰省する度によく一緒に遊んでくれ
ていた。

しかし、ミツチャンはもう中学生で修一には前と違って何か距離が

出来てし
まったかのように思え、何故か話すのが恥ずかしい気持ちになった。
八幡神社の近くのお煎餅屋に一緒に煎餅を買いに行き、長らくしゃ
がみ込ん
で煎餅が焼き上がるのを見ていて、十円で紙袋一杯の煎餅を買って
きた事も
有った。

「あの煎餅やおんちゃん、どっさりくれたね」

「うん」

「修ちゃん。良かったやいか。両手で抱え切れんばあ有るに。袋が
破れやせ

んろうか。早よういんで食べよう」

また何時かは八畳間で籐椅子を出して二人で椅子の上に乗る電車こ
つこをし
て遊んだ事も有った。

「修ちゃん、車掌さんしいや。美知子がお客さんになるき」

「うん。間もなく発車します。お客さんは早く乗って下さい」

「車掌さん、切符下さい」

「何処までですか？」

「後免までお願いします」

「はい。切符です。それでは発車します。ガタンゴトン、ガタンゴトン、ガ」

タンゴトン、次は穴内・穴内。降りる方はお早くお願いします」

「車掌さん、飴玉食べるかね」

「うん。食べる」

「口を開けてみいや。入れちゃうきに」

「ガタンゴトン、ガタンゴトン、次は、てい手結、てい手結」

「車掌さん、違うちや。間違ごちうちゅうよ。穴内の次は矢流やながれやいか」

「ああ、そうか。次は、矢流、矢流・・・」

「そうよね、車掌さん」

「矢流の次は・・・」

「矢流の次は赤野よね。確りしいよ新米の車掌さん」

「ガタンゴトン、ガタンゴトン」

「ガタンゴトン、ガタンゴトン」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「いやちや。修ちゃん寝入っちゅう」

修一は何時の間にか寝てしまった。

「小母さん、修ちゃん寝てしもうちゅう」

「ほうかねえ、遊び疲れたがやろう」

「小母さん、口の中にまだ飴玉が入っちゅうにかあらん」

「ほいたら喉に引っ掛かるといかんきに小母さんが後で取ちよかあ」

「修ちゃん寝たきに、美知子帰る」

「ミツチャン、御免よ。せつかく一緒に遊んでくれてたがやに」

「美知子、何ちやあかまんきに」

「また、遊びにきちやってよ」

「うん、また来るき。小母さん有難う」

ミツチャンは何時も優しく、そして笑顔で修一の遊び相手をしてくれた。

四、蝉取り

午後からは久し振りに武との蝉取りで、昼食が終わった頃に武が蝉取り用

の長い竿の付いた網を持って修一を迎えに来た。武が自分で作った蝉取り専

用で、二メートル程の竹竿を二本つなぎ、先に直径十五センチ程の針金で作

った輪に布の袋を取り付けたものである。

「修ちゃん。行くかよ」

「うん。すぐ行く」

修一は麦藁帽子を被り、武の待っている玄関先に出て行った。しかし、修一

は武になかなか蝉を取らせてもらえず、いつも虫籠を持って武の後を付いて

行くだけだった。

「修ちゃんはまだ蝉取りが下手やき、いかなあよ」と何時も武に言われた。

東浜八幡神社の東側の細い道を通り抜けると妙山寺に至る広い場所が有り、

ここが武と修一が何時も蝉を取る場所で、子供にとってはジャングルのよう

で木がこんもりと茂った薄暗い場所でミンミンゼミやアブラゼミの

鳴き声が

周囲に響いていた。

武は木の上を窺い、

「あの木の上におるき」

武がそう言って網をそつと蝉のいる木の側に近付け一瞬の内に蝉を網の中に

入れた。名人の武でも時々蝉におしっこを掛けられ逃げられる事も有った

が虫籠はいつも三十分程で一杯になった。

暫くして、寺の方から薄汚い格好をした二十五〜六才の男が武と修

一に近付

いてきた。

「おまんら、そこで何しゆうがぜよ」

修一は一瞬どうしたものかと思ったが、武は平気な顔でいた。

「蝉を取りゆうがよね」

武はその男と顔を合わせる事なく木の上の蝉を探しながら言った。

「ここで、蝉を取ったらいかんが」

とその男が言った。

「そうかよ。誰が決めたがぜよ」

武はそのまま、その男を無視して蝉取りを続けていた。暫くその男は二人を見ていたが、その後、八幡神社の方へ何かぶつぶつと言いながら行ってしまった。

「武ちゃん、あの人誰や？」

「コータよ」

「コータ？」

「うん。安芸でも変わちゆうがで有名ながよ。相手にせられなあや。何ちゃ

あこわあないきに。この前も安芸の浜に鯨が打ち上げられた時に放送局が来

てニュースを撮りよった時も、ひっそり鯨に跨って悦にいつちよた。まっこ

と変わちゆうがよ」

いつの間にか修一は足の数ヶ所を蛎かきに刺され痒くなっていた。

五、蜆獲り

翌日の午前中、武の家の前に行くと勉強中の札が掛けられていたので修一

は一人で江湖川に蜆獲りに行く事にした。去年の帰省の折に江湖川で少年が

蜆を取っているのを見て、今度は自分も獲ってみたいと思っていた。家から

北に向って歩き本通りを横切り、更に歩いていくと道幅が細い下り坂になり

江湖川の川岸に辿り着く。川岸に近くなるにつれて道の両側には笹や木々の

枝が垂れ下がり周囲が薄暗くなり木々の枝の周りには数匹の黒い仏トンボが

優雅な姿で羽をひらひらとさせ飛び交い、木の根元近くに生えている草にも

数匹の仏トンボが羽を休めていた。

江湖川の流れは何時もと変わらず、水は透き通り、両岸にはヨシなどの水生

植物が茂り、水中ではエビモ、セキシヨウモなどが流れにそって揺れ、メダ

カやハヤの群れが泳いでいるのがよく見え、川の中程には鰻を獲る竹筒の仕

掛けも三段程に積み重ねられ所々に沈められていた。時折、塩からトンボが

ヨシの葉に止まり水中に尾を垂らし産卵していた。向こう岸は山の麓まで一

面に田んぼや畑が広がり、所々に農家が点在し、その遙か上を鳶が

数羽気流

の流れに乗って優雅に舞っていた。修一が川に入ろうとした時、川の中程を

オニヤンマが水面擦れ擦れに川下から川上に猛烈な勢いで飛んで行き、修一

は「あつ、凄い」と思った。

川岸の石段を下り半ズボンのまま川の中に入り、膝まで浸かりながら持つて

きた箆で川底の泥を掬い、蜆を探り始めた。水はとても冷たく慣れるのに少

し時間が掛かった。暫くして籠が蜆で一杯になった頃、向こう岸から小学五、

六年位の少年が川をざぶざぶと渡り修一に近付いて来た。

「おんしゃ、ここで何しゆう?」

その少年が怒ったような顔をしていきなり修一に言った。

「蜆を獲ってる」

修一はその少年の顔を見て少しまずいかと思った。

「ここは俺の縄張りやきに、ここで勝手に蜆を獲ったらいかんが。獲ったも

んを川に戻しや」

修一はせっかく獲った蜆を川に戻したくなく、またこの川に縄張りなどある

訳が無いと思っただが、喧嘩も苦手で、如何したものかと迷っていた。

「夏休みで大阪から帰って来てるんで縄張りは知らなかった」

修一は咄嗟に言った。

「おんしゃあ大阪から帰ってきちゅうがかよ」

「うん。夏休みで帰って来てる」

「そうながか。ほいたらかまわなや。なんぼでも獲りや」

意外な言葉がその少年から返ってきた。

「あそこの方がもつと獲れるき」

更にその少年は親切に別の場所も教えてくれた。そして、その少年は川を渡

り、もと来た岸まで戻り満足そうに帰って行った。修一はその少年の言動が

可笑しく、またその優しい気持ちを嬉しく思った。確かに、教えてくれた別

の場所では沢山の蜷が獲れた。

近くの妙山寺や川下の土居橋の袂から川面に突き出た木々から蝉の大合唱が

聞こえていた。

翌朝、祖母が修一の獲ってきた蜷を味噌汁に入れてくれた。

「修ちゃん、えらかったね。どっさり獲ってきたやいか」

祖父が味噌汁を啜りながら嬉しそうな顔をした。

「こんまい蜆も入っちゅうが、蜆の親が泣きゆうにかあらんよ」

祖母も楽しそうに言い、孫が獲ってきた蜆をおいしそうに食べていた。

六、母屋

数日後、修一は母家のある黒瀬に行く事になった。安芸の町から安芸橋を

渡り更に北に折れ伊尾木川に沿って細い曲りくねった道を十六キロ程北に行

った、山に囲まれた搦り鉢の底に有る様な村で、村の東側を伊尾木川が蛇行

するように流れ、村に入るには南側に架けられた細い吊り橋を渡らなければ

ならなかった。吊り橋の手前の東の山裾には小さな八坂神社が有り、石段を

上り詰めたお社からは村が一望出来る。神社の石段の手前には水車小屋が在

り、神社の南側の山の上から流れ落ちる水が水車を勢い良く回している。

祖父の知り合いが奥の古井こいまで行くので、ついでに連れて行ってもらうよう

に頼んでくれていた。当日の朝早くにその小父さんがオート三輪で修一を迎

えに来た。オート三輪は運転席の真ん中に単車と同じ様なハンドルが付いて

いて、両側には扉がなく左側に一人掛けの小さな助手席が付いていた。

「岩崎さん、おるかのし」

「横井さんかね、おはようございます」

祖父がその小父さんに挨拶をした。

「岩崎さん、おはようございます」

「今日は面倒ですけど、孫を黒瀬まで積んで行ってつかあさい」

「何ちゃあ、次いでやきにかまわなや」

修一も玄関先に出てきて挨拶をした。

「この子が岩崎さんくのお孫さんかね」

「そうよね。先だって夏休みで大阪から戻もて来たがよ」

「なかなか確しつりした顔つきをしゆうが、誰たに似ちゆうろ」

祖父は孫が褒められて嬉しそつであつた。

「この子の曾祖母おばあさんがまたお遍路に行くがで、その前に曾孫を早よう母屋

によこせ言つて」

「和子さんはまたお遍路に行くがかね。達者なもんよね」

「村の仕事が一段落したらまた行くとか言いよたが」

修一はオート三輪の助手席に座り、山道で揺れて放りだされないよ
うにと助

手席にロープでグルグル巻きに縛られた。

「暫く黒瀬で遊んで来たならええきに。帰りは曾祖母おばあさんが家うちまで一緒に連れ
て帰ってくれる事になっちゅうき」

祖父が修一に言った。

「お孫さんの名前は何と云うかね」

「修一です」

「修ちゃんかよ。ほいたら、おんちゃんがこれから連れて行っちや
うきに、

しっかり掴まつちよりよ」

しかし、「しっかり掴まつちよりよ」と言われても、助手席にロ
プでグルグ
ル巻きに縛られていて、掴まる必要がなかった。

オート三輪はゆっくり走り出し、本通りを右に曲がり安芸橋を渡り、
暫くし

て川北の方へ左折し走るにつれて右側に伊尾木川が見えてきた。次
第に川が

谷のように深くなり、向岸にはトロツコの線路が時折見え隠れし、
原木を満

載したトロツコが安芸に向かって行くのが見えた。山の道は細く、
曲がりく

ねり、集落やその周辺以外は舗装されていない道が殆どで、大きな
岩や小さ

な岩が転がっている処も有った。オート三輪はよく揺れ、修一は景

色を楽しむどころではなかった。小父さんは山道での運転は慣れていて、奥からきたバスやトラックと狭い道でのすれ違いも平気でこなした。暫く行くと山の斜面上から下に太いパイプが二本並んでいるのが見えた。

「あれは奈比賀なひがの発電所よね。もうすぐすると入河内にゅうがうちぜよ。黒瀬はもうじつきよね」

小父さんはオート三輪のエンジンの音に負けないように大きな声で修一に言ったが、揺れが激しく、助手席にロープで縛られている修一は「はい」としか答える事が出来なかった。安芸の家を出てから四十分程走ったところでアチ型の鉄骨の橋梁が見えてきた。

「あの橋を渡つたら黒瀬やきに」

修一にももうすぐ黒瀬だと分かった。橋を渡り暫くすると右側に水車小屋、その向こうに八坂神社の石の鳥居と石段が見え、道が右にカーブする手前に村に入る細い吊り橋が架かっていた。

吊り橋の手前の少し広くなった道路脇にオート三輪が停車し、小父さんは運転席から降りて、修一を助手席に括り付けていたロープを解いてく

れた。

「修ちゃん。母屋まで行く道は分かっちゅうかね」

「はい。分かります」

「ほいたら、おんちゃんはそのまま奥に行くき、皆さんに宜しゅう言うちよ
いてよ」

「おんちゃん、有難う」

オート三輪は左右に揺れながら砂埃を立て走って行った。

修一は水車小屋の前で暫く水車の回るのを見てから八坂神社の石段を上った。

でこぼこした細い石を並べた傾斜の急な石段で、石段を上り詰めたお社の有

る場所から村を一望した。田畑で野良仕事をしている人の姿、村に沿って蛇

行した伊尾木川の流れなどが見え、遠くからはトロツコを引っ張る気動車の

汽笛の音も微かに聞えて来た。

修一は神社の石段を降りて村の入口に架かっている細い吊り橋を渡り始めた。

高い所が苦手な修一には下半身が竦む思いがした。吊り橋の中程から遙か下

を恐る恐る覗くと水の色が薄青く透き通り川底まで見へ、鮎の群れ泳ぐ姿が

見へた。怖さの中にも綺麗な流だと思った。

吊り橋を渡り細い道に沿って村の中程まで行ったところに母屋がある。垣根

に囲まれた広い庭の有る藁葺き屋根の家で、木戸から庭に入ると、曾祖母が

鶏小屋の前で鶏に餌をやっていた。

「曾祖母ちゃんおばあ」

修一は大きな声で呼んだ。

「まあ。修ちゃんかね。よく来たね。また、大きおおゆうなつちゆが」

曾祖母も笑顔で修一を出迎えた。

「疲れちゃあせんかよ」

「大丈夫や」

「偉いもんよ、修ちゃんは。今年は五年生やったかね」

「うん」

「そうかのし、早いもんよね。この前までこんまかつたに」

曾孫の成長振りを見て嬉しくなり満面の笑みを浮かべていた。

「おんちゃんとおばちゃんは田に出ちゆうきに。もってきたら昼御飯にする

き、それまでゆっくりしよりよ
「

おんちゃんは曾祖母の長男の健一で修一の母にとっては伯父にあたり、おば

ちゃんはそのお嫁さんでした。修一は土間の奥にある炊事場に行き、大きな瓶かめ

に溜まった水を柄杓で掬い一気に飲み干した。竹を半分に割り樋にして何本

も繋いで裏の山から湧き出ている水を炊事場の瓶かめまで引いてきていた。時々、

水が流れて来なくなる事があり、その時は樋に添って裏山に行き、樋に溜ま

った落ち葉を取り除く作業をしなければならなかった。修一は山の水も井戸

水と同じ様に美味いと思った。

昼時になり長男夫婦が田の作業から食事に戻ってきた。

「修ちゃん、よう来たね」

健一が修一の姿を見て懐かしそうに言った。

「うん」

修一が答えると、健一のお嫁さんの孝子も、

「修ちゃんは、また背が伸びたね。お父さんも、お母さんも喜びゆ
うろ」

と笑みを浮かべて修一に言った。

健一夫婦には順子と言う一人娘だけで、修一が来ると何時も自分の息子のよ
うに可愛がってくれた。

「順子姉ちゃんは」

「今年の春から高知に勤めに行きゆうきに、暫くは戻ってこれんにかあらん」

健一がそう言うと、修一は少しガツカリした。順子は修一が黒瀬に来る度に
吊り橋の下の川で水泳を教えてくれたので、今年も一緒に泳げるかと楽しみ
にしていた。

「おまん、学校の勉強はこちゃんとしゆうかよ」

健一がいきなり修一に訊いた。

「勉強は……」

と言って暫く間を置いて

「ボチボチしてる」

と答えた。

「ほんなら、ええわや。勉強はこちゃんとせないかんぜよ」

健一が修一の頭に大きな手の平をのせながら言った。

「昼御飯が済んだら、おんちゃんらは、また田に出ないかんに、西のおんちゃんくに遊びに行て来たらええわや。友恵もおるろうきに」

西のおんちゃんとは山中雄助、曾祖母の弟で実家を継いでいた。家が母屋か

ら西の方角に有り、村や親戚では、西のおんちゃんに通っていた。

友恵は雄

助の孫娘で修一と同じ小学校五年生であるが、山育ちのオテンバで修一には

少し付いて行けないところがあり苦手であった。

七、友恵

食事が終わると修一は健一の言ったように西のおんちゃんの家に出掛けて

行った。格子戸を潜ると縁側で友恵が塗絵をしているのが見えた。

「友ちゃん」

修一が声を掛けると、

「修ちゃん、今年も来たがやね。そろそろ遊びに来るがやないかと思うちよ
った」

「どうして分かったん？」

「健一のおんちゃんから修ちゃんが今日黒瀬に来るって聞いちよったがよ。ほ
いで、さっき修ちゃんが吊り橋を渡りゆうがを見たがやき」

「それでか」

「西のおんちゃんは？」

「山の木を見に行っちゆうにかあらん」

「西のおんちゃんも忙しいんやなあ」

「田や畑の仕事と山の見回りですいつも忙しそうにしちゆう。ねえ、

修ちゃん。

母屋の北の山裾に大きなカタツムリがどっさり居るくが有るがやけんど、これから一緒に見に行ってみんかえ？」

「うん、行く」

「ほいたら、付いてきいよ」

修一は友恵の後について村の細い道を北に歩いて行き、母屋を通り過ぎ、山

裾に有る疎水のところまで来た。伊尾木川から村の田んぼに水を引くために

作られた幅が一メートル、深さが五十センチ程の疎水で、浅い水の流れの底

の至るところにイモリが群れていた。それを見て、爬虫類が苦手な修一は暫

く立ち止まっていた。しかし、友恵は平気な様子で先にどんどん進むので修

一は仕方なく後に付いて行った。

「イモリがおる」

修一が友恵に言うと、

「修ちゃんはイモリが怖いがかね」

「べつに怖くはないけど・・・」

修一は瘦我慢やせがまんをした。

「母屋のお婆さんが言いよったよ。修ちゃんは怖がりやきにて。気持ちがこ
んまいて。田舎の便所は家の外に有るき、修ちゃんは夜一人でよう
行かん言
うて」

「それは前の話や」

修一は向きになったが正直なところ母屋の便所は家を出て庭の端ま
で行かな
ければならず、夜は怖くて仕方がなかった。

「ほら、修ちゃん見てみいや。あそこにどっさりカタツムリが居る
るっ」

友恵が指差した疎水の内側の壁には何匹ものカタツムリがへばり付
いていた。

「修ちゃん、捕まえてみるかよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

修一は次の言葉が出てこなかった。

「修ちゃん、カタツムリ捕まえるのが気持ち悪いながやないかえ？」

友恵が修一をからかった。

「そんな事はない」

修一は向きになって言った。

友恵はスカートの裾をパンツの中に挟みブルマーのようにして疎水の中に入
つていった。すると、疎水の底に居たイモリは驚いて四方に逃げて
行ってし

まった。友恵は一番大きなカタツムリを捕まえた。

「修ちゃんも中に入ってきいよ」

修一がゴム草履のまま疎水に入っていくと、友恵が捕まえたカタツ
ムリを修
一に手渡した。

「修ちゃん、このカタツムリ大きいよ」

カタツムリは殻の中に閉じこもり動かなかった。

「うん。大きいな。でもこのカタツムリどうするんや？」

「その葉っぱの上に載せてみいよ」

修一は友恵の言うように疎水の横に生えている紫陽花の大きな葉の
上にカタ
ツムリをそつと置くと、殻から顔を出し二本の角を動かしながらゆ
っくりと
動き始めた。それを確認するかのようにして修一と友恵は更に疎水
の中を歩

いて行った。途中、疎水は左にくの字に曲がり、右に視界が大きく

開け伊尾

木川の透き通った水の流れと、その向こうに青々とした山の姿が見えた。

「修ちゃんくの大阪の家にはテレビは有るがやる？」

突然、友恵が修一に訊いた。

「うん。去年買ってもらった」

「テレビ見るがは楽しいかね？」

「うん。楽しいで。去年までテレビが無かった時は、お使いの帰りに時々電

気屋の前でよくテレビ見てたんや。そしたら帰る時間忘れてしもてよく怒られた」

「修ちゃんはあほやなあ」

「あほやない。面白いんや。早よ帰えらなあかんと思てんやけど電気屋の前

通るとつい見てしまっんや」

「テレビ見るががそんなに楽しいろつかえ？」

「うん。楽しい。月光仮面なんか最高や」

「何？それ」

「正義の味方や！」

「友恵には分からんけど。黒瀬にはテレビが一台も無いきに。友恵もテレビが早よう見てみたいちゃ」

「そしたら大阪の家に遊びに来たらええは。何時でも見せたる」

「友恵、大阪に行くことないきね。修ちゃんはええことよね。何時もテレビが見れて」

修一はそれ以上何て言って良いのか分からなかった。

「修ちゃん、動いたらいかんよ」

「どうしたん」

「修ちゃんの背中にカミキリムシが止まっちゅう。捕まえちゃうきに動かれんよ」

友恵はそつと手を伸ばし、三センチ程のカミキリムシを指で捕まえた。体の色は青みがかつた黒で背中に大きな白い斑点が幾つも有った。

「修ちゃん。見て。背中の模様が綺麗ろっ」

「うん」

修一は噛まれるのではと心配した。

「どうしてカミキリムシと言うか修ちゃん知っちゃう？」

友恵は捕まえたカミキリムシを修一に見せながら訊いた。

「よう知らん」

「人の髪の毛を切るからカミキリムシって言うがやと」

「本当？」

本当かどうかは友恵にも分からなかったが、

「本当やちや。修ちゃんの髪も切ってもらっかよ」

と言って友恵は修一の頭のところにそのカミキリムシを持ってきた。
修一は

「ええよ、ええよ」

と言いながら、驚いたように二・三步後ずさりしたその時、カミキリムシは

友恵の指先から離れ、羽を広げて空高く飛んで行ってしまった。修一と友恵

は暫くカミキリムシが飛んで行った方向を見ていたが、その内に空の色と混

じり合い見えなくなってしまった。

「飛んで行ってしもうたね」

友恵がカミクリムシの飛んで行った方向を見ながら言った。
修一と友恵は暫く疎水の淵に座り伊尾木川を眺めた。

「順子ねえちゃんがおらんけど、明日、吊橋の下でまた泳ぐかね。あまり

深みには行かれんけど。修ちゃんはカナズチやきに」

友恵はいつも一言多かった。

「カナズチと違う。夏休みの前に学校のプールで練習してきたからうまく泳げる」

「最初の頃、修ちゃんは水が怖い言うて、よう川に入らざったに」

「一、二年の頃の話や。今は学校の二十五メートルのプールで往復も出来る」

「プールと川は違うきに。水も冷たいき、気を付けないかんえ」

「そんな事分かってる。鮎も突くから」

「修ちゃんに、伊尾木川の鮎が突けるろうかね？」

友恵は修一には鮎突きは無理だと思っていた。

「太い鮎を突くから」

「突いたら友恵が焼いて修ちゃんに食べらいちやうきに。楽しみに

しゅじょ

「楽しみにしてて」

「修ちゃん。涼しゅうなってきたね。そろそろいぬるかね」

夏場でも周囲を山に囲まれた村では午後の四時頃になると日差しが遮られ、

山の木々から発せられる冷気が漂い涼しくなってくる。山裾の道を安芸に向

かって砂埃を上げながら走って行く県交通のボンネットバスが見えた。修一

は黒瀬に来て良かったと思った。でも、今夜からの便所の事が心配になった。

八、薪割りと五右衛門風呂

修一が母屋に戻ると炊事場では曾祖母と嫁さんとで食事の支度の最中で、

健一は庭先で薪き割りをしていた。安芸の家も同じであるが、この村には都

市ガスやプロパンガスなど無く、料理や風呂は全て薪を使っていた。

「薪割りが終わったら直に風呂を焚くきに入りや」

「おんちゃん、僕にも薪割りさせて」

「おまん、大丈夫かよ。怪我するきやめちよきや」

「大丈夫や。おんちゃん。安芸の家でも時々薪割りしてるから」

健一は少し考えてから修一に言った。

「ほな、待ちより」

健一は、物置から少し小さめの斧を出してきて修一に渡した。

「よう切れるき、注意してやらんといかんぜよ」

「はい」

健一は心配そうに見ていたが、修一もその内練れて来たのか、うま
く薪を割

れるようになった。

「偉いもんよ」

感心したように修一に言った。

「おまん、風呂も焚けるかよ」

薪割りが一段落したところで、健一が訊いた。

「安芸の家の風呂は時々焚いてる」

「ほいたら、ここの風呂も焚いてみたらええわや」

修一は自分が一人前として認められたようで、嬉しかった。

「風呂桶に水ははっちゅうきに、焚いたらええだけやきに」

そう言って健一は家の中に入っていった。

風呂は昔ながらの五右衛門風呂で、湯船には丸い板が一枚浮いていた。修一

は窯の前に座り、新聞紙を数枚丸めて火を付け投げ入れ、その上に細い木切

れを順番に重ねてゆき、竹をくり貫いたファイゴで吹き、火の勢いが強くなっ

た頃を見計らって薪を焼べていった。最初の頃は煙が凄く、風向きによって

は煙が目に沁みて目が痛くなり涙が出来る程であったが火の勢いが強くなる

に従い徐々に煙も治まり、窯の中も安定した火の勢いになった。後

は間を見
て薪を足して行くだけであった。二、三十分した頃に、健一が修一
を呼びに
来た。

「もう、沸いちゅうき、早よう入りや。風呂が済んだら直ぐにご飯
にするき」

母屋の風呂釜は大人が膝を曲げてやっと浸かれる位いであるが小学
生の修一
には充分余裕が有った。

「温ぬるくないかよ」

健一が風呂場の窓越しに声をかけた。

「おんちゃん。ちようどええ」

「そうかのし。今日は、曾祖母おばあさんが修ちゃんの好きな五目ごもくずしを
どっさり
作ってくれちゅうき、それに昆布巻きも作ちやう。盛大食べよ。黒
瀬に来た
らどっさり食べて大きゅうなって帰らないかんぜよ」

「はい」

修一は夕飯が楽しみで、洗うのもそこそこに風呂から上がった。修
一にとっ
ては久しぶりに柚酢の利いた田舎ずしのご馳走になった。

夕食を終えた頃には、村全体が闇に包まれ、普段静かな村が一層静かさを増し、ただ聞こえるのは蛙の鳴き声だけで、集落には外灯も無く、明るく輝いているのは夜空の月と満天の星空だけで、涼しく静かで空気の澄んだ長閑な夏の夜となった。

九、西のおんちゃん

夜も更けた頃、庭の木戸から懐中電灯を照らしながら誰かが入って来た。

「かすねえ和姉、おるかよ」

「雄助かね」

曾祖母が返事をした。

「修ちゃんが来ちゆうて友恵から聞いたきに、ちくつと顔を見に来たがよ」

「そうかね、そらご苦労さんなことよ」

「また、背が伸びて大きゆうなっちゆうろつ。子供は大きゆうなるがが早いきに」

「そうよね、去年よりうんと大きゆうなっちゆうぞね」

「かすねえ和姉も楽しみな事よ。なんせ曾孫やきに」

「まあ、上がったとせや」

「ほいたら、ちつと上がらせてもらつかのし」

「修ちゃん。西のおんちゃんが来てくれたぞね」

曾祖母が修一を呼んだ。

「おんちゃん、こんばんは」

修一が照れたような顔で挨拶をした。

「修ちゃんかね。こんばんは。まっこと、去年より大きゅうなっちゆうが。」

どうぞね、大阪のお父さんもお母さんも達者でやりゆうかのし。暫く会おちやあせんが」

「はい、元気です」

「おまん。今年は一人で土佐に戻んてきたがやとね」

「はい」

「偉いもんよ。和姉も先が楽しみなことよ」

「そうよね。もう一人で帰ってこれるがやきに。親は心配しゆうにかあらんけんご」

曾祖母が修一の顔を見ながら嬉しそうに言った。

「さつき友恵が言いよった。修ちゃんは大阪で毎日テレビが見れて羨ましい」

て。早よう修ちゃんのお嫁さんになって大阪に行くて言いよったが」

修一は友恵がお嫁さんになると聞いて顔が火照り赤くなるのを覚えた。

「そつよね、テレビは高いきに、なかなか買えなあよ。安芸の町でも持っち

ゆうくはまだ少ないろう」

曾祖母が雄助に言つと、

「そつよ和姉。高たこつてなかなか買へるもんやないわや。ほいでよね、黒瀬

はすり鉢の底に有る様なもんやき、電波が届かんとか言いよつたが」

「修ちゃん、友ちゃんを早ようお嫁さんにしちやりや」

曾祖母が修一の顔を見ながら冗談を言つと、修一は益々顔を赤くした。

十、戦争中の話と墓参り

翌朝、修一は早くに目が覚めた。修一の寝ていた蚊帳の上には部屋
屋の電灯
の灯りを頼りに夜中に大きな蛾が寄って来て、溜まり場のようにな
っていた。

「修ちゃん。おはよう。夏休みの昆虫採集が出来るろう」

蚊帳の上の蛾を見て孝子が言った。

「おはようございます。でも蛾は昆虫採集にはあかん」

「そうかねえ。こればあどっさり居るに残念やね」

孝子は蚊帳をたたみながら言った。

「朝は牛乳がないきにね。その代わり、これからヤギの乳を搾るき
待ちよっ
てよ」

「僕も一緒に行きます」

修一はそう言って孝子の後に付いて行った。母屋の向かいの細い道
を隔てた
畑の横にヤギの小屋が有り、真っ白な親のヤギが二匹と子ヤギが一
匹飼われ
ていた。ヤギは口をモグモグとさせながら小屋に入って来た二人を
きよとん

として見詰めた。孝子は手馴れたように雌ヤギの乳房を濡れた布で拭いてから乳を搾り始めるとアルマイトの桶に勢いよくヤギの乳が溜まって行った。

「これはあでええろう。子ヤギの分も残しちよいちやらないかんきにね」

修一は乳搾りを見ながらヤギは本当に紙を食べるのだろうかと思っ

た。朝の集落はまだ東の山の影に覆われ肌寒く人通りもなく聞こえるのは鶏とヤギの鳴く声だけであった。

「修ちゃんはこの村に爆弾が落ちた話をお母さんから聞いたことないかね」

「まだ、聞いてへん」

「そうかね。戦争中この村に爆弾が落ちたがよ」

「この村に？」

「そうよね。母屋の西の角の向かいの家に爆弾が落ちたが。誰っちらや怪我は

せざったけど、牛小屋の牛が吹き飛ばされて大変ながやった。どうしてこ

んな山奥に爆弾が落とされたがか皆な不思議がりよった。おそらく空襲に行

た帰りの飛行機が余った爆弾を落として行ったがやないろうかて皆で噂しよ
った。怖い事よ。戦争の終わりの頃は安芸の町に住んじゅう人も艦
砲射撃が
有る言つて奥の村に非難した人も多かつたがやきに。戦争は嫌いやよね」
孝子が一通り爆弾が落ちた話をしてから、修一の両親の事も話し始
めた。

「修ちゃんのお母さんも戦争中は勤労働員で、兵庫県の川西に飛行
機を造り
に行ちよつたがやきに。ほいでよ、あんたのお父さんは戦争が終わ
つてから
長らくシベリアに抑留されて大変な目に会あつたらしいきに」

父親がシベリアに抑留されていた話は以前に聞いた事が有つたが、
戦争が如
何に悲惨であるかは戦後生まれの小学生の修一には知る術もなく、
それどこ
るか戦争映画を見て格好良いとまで思っていた。

朝食が済むと修一は曾祖母に連れられ先祖の墓参りに行くことにな
った。曾
祖母には何時もの日課であるが、修一にとっては年に一度有るか無
いかの大
事な行事で、曾祖母の後ろから水が一杯入ったヤカンと密、米袋、
線香、口
ーソクを持って付いて行った。母屋の西の細い曲りくねった山道を
登って行

った山の中腹に墓所が有り、小さな墓石が順番に並び、中には苔む

して刻ま
れた名前も読めない墓石も有った。

「修ちゃん。この村の元々の御先祖さんは、母屋の北側に先祖宮と
してお奉

りして有ったがやけんど、昔、山津波で流されてしもつたがやよ。
ほいで、

この場所に新たに墓所を作ったがやきに。あんたの曾祖父ひじいさんもこ
こに居る

がやきに。修一がまた来ました言つて、盛大お奉りしなさいよ」

「うん」

修一は曾祖母からそう言われて神妙な顔つきでお参りをした。

「母屋には昔からの釣書も有ったけんど、曾祖母おばあが嫁に来る前の前
の代の時

に二度の火災で全て燃えてしもつたわや。惜しい事をしたもんよ。
それも皆、

十二月の二十八日の餅つきの日よね。そやきに母屋はそれ以来十二
月の二十

八日には絶対餅をつかん事になつちゆうがよ」

曾祖母は修一も小学五年となり物事が分かり始めた年頃ではと思い
昔の母屋
の事を話した。

「母屋の北の先祖宮があつた所に御先祖様が埋めた宝物が埋まつち
ゆ言つて、

前に何度か何処かの人が掘らしてくれえ言つて来た事も有つたけん

ど。結局、掘ったち何んちゃあ出てござった。おそらく昔の山津波でとつと下に流されちゅうがにかあらん。出て来たち昔の鎧兜と錆びた刀ぐらいなもんよね」

修一は宝物の話は面白いと思い、自分も大人になったら掘ってみたいと思っ

た。墓所の有る山の中腹からは回りの山々が良く見渡せ、曾祖母が指差しながら修一に言った。

「あの山とあの山は修ちゃんが大きゅうなったら修ちゃんのものになるがやきに。あの山には修ちゃんが生まれた時に、あんたのお祖父さんが将来の学費の為に言つて杉の苗をどっさり植えたがよ。修ちゃんが大学に行く頃には、太^{ふと}をなっちゅうろう。盛大、勉強しいよ。勉強して偉ろう成らないかんぜよ」

修一は祖父の気持ちは有難いと思ったが、勉強は苦手で、果たして大学まで行けるか今のところ自身が無かった。

十一、鮎突きと西の山

墓参りから帰ると母屋で友恵が修一の帰りを待っていた。

「修ちゃん、お墓参り行てきたがかね」

「うん」

「藪蚊に刺されざったかよ」

「少し足と腕を刺された。痒ゆうてたまらん」

「半袖と半ズボンで行くきによ」

「友恵が痒いところをかいちゃをかえ」

「ええ、ええ」

「何ちゃあ、遠慮しなや」

修一は昨晚、西のおんちゃんから友恵が早く修一のお嫁さんになり
たいと言

っていた話を思い出し照れくさくなった。

「お昼過ぎたら泳ぎに行くき。川原は昼頃でないと言たらんきに、今は

まだひやいきにね」

「うん。分かった」

「友恵はこれから畑を手伝いに行くき、一時になったら、家うちんくに来たらええわや。待ちゆうきに」

「うん、そしたら一時に友ちゃんの家に行くから」

友恵はそのまま両親のいる畑に手伝いに行った。

一時になると修一は麦藁帽子を被り水泳パンツのままタオルを首に掛け、健一から借りた箱メガネと？やすを持って友恵の待つ西のおんちゃんの家に行つた。友恵は紺色の水着のまま縁側に座り足をブラブラさせて修一が来るのを待っていた。

「友ちゃん」

「修ちゃん、来たかね」

奥の座敷では昼食を終えた友恵の両親が卓袱台の前に座っていた。

「修ちゃん、久しぶりやね。また背がのびちゆうね」

友恵の母親の房子が修一を見て言った。

「ごんにちは」

修一が友恵の両親に挨拶をした。

「大阪の夏は暑いろう。おばさんらあも戦争前は大阪に住んだ事が有ったけど、夏は蒸し暑つうてたまらざったよ」

房子がそう言つと、房子の向かいに座っていた父親の雄一が言った。

「でも、友恵は大阪に行きたいって言つたぜよ。おまんも早よう大きゆうなつて友恵をお嫁さんにしちゃとつせや」

「お父ちゃん、そんなこと修ちゃんの前で言われんきに。友恵恥ずかしいぢや」

友恵が顔を真っ赤にした。

「けど、おまん修ちゃんのお嫁さんになりたいって言つたがやないか。修ちゃんのお嫁さんになったら大阪に行けるきに、ほいたら何時でもテレビが見れる言つて」

友恵は慌てて修一の手を掴み川原に走つて行った。

「修ちゃん、さっきのお父ちゃんの話し、何ちゃあ気にせられんよ。冗談を言つがやきにね」

修一も顔が赤くなり困ってしまった。

川では既に同じ村の子供達が楽しそうに泳いでいた。

「修ちゃん、鮎を突くがかね」

「うん、おんちゃんから箱メガネと？^{やす}を借りてきたから」

「修ちゃんに伊尾木川の鮎が突いたら大したもんよ」

そう言つて友恵は川の中に入って行つた。

修一は岸近くの浅瀬で箱メガネを覗きながら鮎を突こうと？^{やす}を鮎目掛けてゴ

ムで弾いても掠りもしなかった。暫く続けていたが結局一匹も突けず、その

内に日焼けで背中が赤くなりヒリヒリしてきた。すると、川の中程で泳いで

いた友恵が修一の側に来て言つた。

「突けたかね」

「いや、まだ・・・」

「早よう獲らな母屋の今晚のおかずが無いぞね」

友恵が修一をからかった。

「修ちゃんが沢山鮎を突く事が出来たら漁師が生活に困らあよ。鮎^{いし}を突いた

がましやない」

友恵はそう言って、また泳ぎに行った。

友恵にそう言われて修一は一瞬ムツとした。実は鮠こらも川底の石を剥がして突こうとしたが？の柄やすが長すぎて流れに取られうまく使えず結局は逃げられてしまっていた。

「今日は止めた」

と修一は思い、川の水で背中 of 火照りを冷やしてから川原に腰を下ろして流れを見ていた。

「修ちゃん、もう止めたが？」

友恵が川原に上がってきた。

「うん、今日は止めや」

「何ちゃあ獲れざって残念やね。獲れたら、友恵が焼いて修ちゃんに食べさせちゃったに」

「安芸に戻ったら安芸川で“つんがけ”で鮎あゆを獲ることにする。今日はもう
えい」

修一は負け惜しみにそう言った。

「修ちゃんは“つんがけ”が出来るがかね。“つんがけ”が出来るに、なぜ突けんがやるね？」

修一は友恵に気持ちを見透かされているように思った。

暫く修一と友恵は川原に座り川の流れを見ていた。吊り橋を川原から見上げると凄く高い所に橋が掛かっているように思えた。友恵を見ると首筋、両腕、両足が日に焼け真っ黒になっていた。

「修ちゃん、これから家にい^{うち}んで、着替えてから母屋の西の山に行ってみんかね」

「西の山？行ってもええよ」

修一と友恵はそれから急いで家に戻り、着替えを済ませ西の山に行く事にした。

「修ちゃん、早ようしいや」

友恵が母屋まで修一を迎えに来た。

「直ぐ済むから。少し待って」

「修ちゃんは支度が遅いちゃ」

修一は友恵に急かされるように母屋を出て行った。そこは、朝に曾祖母と墓

参りに行った山で、墓所を過ぎ更に細い曲りくねった道を登って行った。太

陽は既に西の山に隠れ見えなくなっていた。暫く登って行くと栗の木が沢山

植へられている少し広い場所に着いた。

「青い？^{いが}が沢山付いてるな」

修一が栗の木を見て言うと、

「？^{いが}がまだ青いきにいかん。秋になったら、栗がどっさり取れるきに、取れ

たら修ちゃんに送っちゃうえ。楽しみに待ちよってよ」

「栗を送ってくれるんか」

「うん。どっさり送っちゃう」

「そしたら楽しみにしてる」

「修ちゃん。あそこにトロッコの線路が見える。もつすぐしたらトロッコ

が通るにかあらんよ」

「ぶっん……」

すると、暫くしてトロッコを引っ張る気動車の汽笛の音が聞こえてきた。

「修ちゃん。今度はトロッコで安芸に戻るがやる」

「うん、バスでなくてトロッコで戻ると、曾祖母ちゃんが言った」

「ほいで、修ちゃんは安芸に何時戻るなが」

「曾祖母ちゃんが、明後日とか言ってた」

「明後日？どおいて？早いちゃ」

友恵が驚いたように言った。

「曾祖母ちゃんが明後日安芸に行くので一緒に戻る。そして、曾祖母ちゃん

は安芸に四、五日居ってからお遍路に行くて言うてた」

「修ちゃん。黒瀬に来たばかりやいか。もっと長〜居たらええに」

「曾祖母ちゃんも居らんなるし、おんちゃん、おばちゃんも畑が忙しいから」

「修ちゃんはまっとう黒瀬に居れたらええに」

友恵は少し寂しそうな顔をした。

修一は黒瀬も安芸の町と同じ位好きであったが、どちらかと言えば安芸の家

の方が修一には過ごし易かった。夜の闇の中で懐中電灯を照らして

行く庭の

角すみに有る便所は遙か彼方に有るよつに修一には思えた。友恵には母屋の便所

に行くのが怖いとはさすがに言えなかった。

十二、八坂神社と友恵の絵

翌日も修一は友恵と午後から吊橋の下の川に泳ぎに行った。そして結局は

鮎を一匹も突く事が出来なかった。

「修ちゃん、よう突かんがやね」

修一は悔しくて黙っていた。

「まっとう長ごう黒瀬に居^おつてよね、母屋のおんちゃんに鮎の突き方を教えて

もろたらええに。友恵、修ちゃんの突いた鮎なかなか食べれんやいか」

「来年の夏は僕の突いた鮎食べさしたる」

と言ったものの、来年は必ず鮎が突けるか自信が無かった。

「来年まで待たないかんがかね。友恵、残念やちや」

修一は鮎を突く事より、今は背中の日焼けが痛くて堪らなかった。

「友ちゃん、そろそろ帰る。涼しくなってきた」

「そやね。そろそろいのかね。ほいたらよ、帰って着替えが済んだら八坂神

社のお社で待ちゆうぎに来てよ」

「何か有るんか？」

「楽しみにしよって。ええもん見せちゃうきに」

「じゃ、後で行くから」

修一は着替えを済ませてから直ぐに八坂神社に行った。八坂神社の石段を上

り、お社の前まで来ると友恵の姿は無く、お社の裏も見たが友恵は居なかつ

た。修一はお社の前の石段に腰を下ろして友恵が来るのを待つ事にした。蝉

の鳴き声が響き渡り、神社の南側の斜面を山から湧き出た水が勢いよく音を

立てて水車小屋の方に流れ落ち、水車はその水を受け休む事なく回り続けていた。

「友ちゃん、如何したんやろ」

と修一が思った時、急に後ろのお社の扉が勢い良く開いた。修一は驚いて座

っていた石段から飛び退き、扉の方を振り返った。

「修ちゃん。驚いたろう」

それは友恵であった。

「別に、驚いてへん」

実際は心臓が止まる程に驚いていた。

「修ちゃんの事、脅かしちゃおうと思って先に来て待ちよったがよ。修ちゃん」

んは怖がりやきに」

「別に怖くはなかったけれど」

修一は負け惜しみを言った。

「そうかね」

「そっや！」

友恵はクスクスと笑っていた。

「友ちゃんは意地悪やな」

「友恵は意地悪やないきに」

友恵が向きになって修一に言った。

修一はわざと怒った様な顔をして暫く黙っていた。

「修ちゃん。怒ったが」

友恵が修一の顔を見て心配そうな表情をした。

「別に、怒っては無いけど」

「けど、何？修ちゃん、御免よ」

友恵は少しべそをかきそうな顔になり修一は慌てて、

「怒ってへんよ！」

と強く言うと、

「ほな、かまんけんど。良かった！」

友恵は直ぐに楽しそうな顔に戻った。

それから修一と友恵はお社の前の石段に座って村を眺めた。

「修ちゃん。友恵はここから見る景色が一番好きなが。村も、伊尾木川も、

吊橋も、全部、全部好きながよ！」

「友ちゃんもか？」

「修ちゃんも好きなが？」

「うん。大好きや！」

「ほいたら友恵と同じやね。前に学校で図工の宿題でこの景色を写生した

事が有るながやき。修ちゃんにその時の絵をやるつもり思おて持ってきたがよ。

あまり上手やないけんど」

「僕にくれるんか？」

「大阪にいたら勉強机の前に張っちゃいて。ほいたら何時も黒瀬を思い出せるろつきに」

修一は友恵から絵を受け取った。

「うん、有難う。友ちゃんは絵が上手いなあ。大阪に帰ったら机の前に張っとく」

画用紙にクレヨンで綺麗に描かれていた。

「友恵は図画と体操が得意やきに。他の勉強は余り得意やないけど。修ち

ゃんは何が得意なが？」

「僕は……」

と言って、修一は返事に困った。

「まだ、どれが得意がよく分からへん」

「修ちゃん言うてみいや。修ちゃんずるいちや」

「ずるくない。僕にはまだどれが得意か本当に分からん」

「そつちやるかね？」

友恵は納得のいかない表情をした。

修一の学校での成績は飛び抜けて良いものも無く、また悪いものも無く、全

ての教科の成績が中位いで自分自身もどの科目が得意か分からなかった。と

言つか得意なものが無かった。

「修ちゃん、ホウズキ、よう鳴らすかね」

「前に順子ねえちゃんが教えてくれた事が有ったけど、やり方忘れては」

「見よって、友恵が鳴らしちゃうきに」

「中の実をよくもんで出して、皮をこうして鳴らすがやきに」

さすがに友恵は上手く鳴らした。

「修ちゃんもやってみいや」

修一は何度も試してみたが結局は上手く鳴らす事が出来なかった。

「修ちゃん、上手く鳴らんね」

「どつして鳴らんのかな」

「友恵のやり方をよう見て覚えちよきよ」

「うん」

友恵は上手くホオズキを鳴らし続けた。そして、ホオズキを鳴らし終わると

友恵が修一に訊いた。

「修ちゃんは大人になったら何に成りたいと思いううが」

「まだ分からん」

と答えて、「友ちゃんは何に成りたい」と訊こうと思ったが、「修ちゃんのお嫁さんに成りたい」と言われるのではないかと思いつくのを止めた。

「友恵は保母さんに成るが」

修一はドキドキしていたが意外な答えに安心はしたが少し期待外れでも有った。

「小さな子供が好きやきに、保母さんになって毎日沢山の子供達と一緒に暮

らす。高知の学校で保母さんの勉強をして、安芸の保育園に勤めようと思

いゆうがよ」

「安芸の保育園？」

「そうよね。安芸の保育園やったら、黒瀬からも通えるろう」

修一は友恵がそこまで考えているのに驚いた。修一自身は将来自分

が何に成

りたいかなどは今まで具体的に考えた事が一度もなかった。

「修ちゃんも大きゅうなったら安芸で働いたらええやいか」

修一はそうしたいとは思っていた。出来ればずっと安芸の町に住みたいと。

西の山の向こうの空は夕焼けで真っ赤に染まり、神社の横を流れ落ちる水の

音と水車の回る音に混じりヒグラシの鳴く声が聞こえてきた。

十三、トロッ」

翌日の朝、修一は曾祖母と安芸に戻る前に西のおんちゃんの家
に寄った。

「雄助、居るかのし」

曾祖母がそう言つと奥から房子が出てきた。

「おはようございます。お父さんは今日の朝とうから自転車で安芸
の町まで
行つたぞね。何か届け物が有る言つて。今日は雄次さんくに泊まる
て言いよ
つたけんど」

「そうかのし。ちつと挨拶と思つて来たがやけんど」

「修ちゃん。安芸に戻るがやとね」

房子が残念そうな顔をした。

「はい」

「まつと黒瀬に居つたらええにね。友恵が寂しがりよつた。また来
てよ。友

恵に手紙を書いちゃつてよ」

「はい。友ちゃんは？」

「さつきまで居ったがやけんど、何処かへ行たがやないろうか」

「そろそろトロッコが通る時間やきに行かないかんき。雄助の嫁さんには一

ヶ月程で戻るきにて言うちよいてつかあさい。雄助にはどうせ安芸で会つる

うき構かまわな」

「お遍路に行くがやとね。和子おばさんも気を付けて行ってきてつかあさい」

ね」

「何ちゃあ心配いらんぜよ。お大師さんが何時も守ってくれちゆうき」

「修ちゃんはまだ暫くは安芸の家に居るがやろう」

「はい。お盆が過ぎる頃までは居ます」

「大阪へいんだら、お父さんにもお母さんにも宜しゆう言うちよいてよ」

「はい」

「お父さんもお母さんも忙しいろつけど、たまには黒瀬にも来るように伝えとつせ」

「はい。伝えます」

「ほいたら、行きますきに。後の事は頼みます」

曾祖母が房子にそう言って修一と西のおんちゃんの家を出た。曾祖母はもん

ぺ姿で背中には畑で採れた野菜などが沢山詰まったりリックを背負い、右手に

紐で十字に縛った柳行李を持ち、左の手には信玄袋をぶら下げていた。

「曾祖母ちゃん、一つ僕が持つから」

「重たいきに、何ちゃあ構わんよ」

修一は柳行李を曾祖母の手から奪い取るようにして持ったが、一瞬よろけ、

余りの重さに内心驚いた。

「修ちゃん、重たいろう」

「重くない。大丈夫や」

と言ったもののトロツコの乗り場まで持っていけるか心配になった。

西のおんちゃんの家を出てすぐ右に折れて畦道伝いに歩いて行くと程なく小

高い長く続く土手が有り、その上がトロツコの軌道になっていた。土手の手

前で友恵が一人で座っているのが見えた。

「友ちゃん。どうした」

修一が友恵を見付け声を掛けると、

「修ちゃんらあを送りにきたがよね」

「別にええに」

と言ってから修一はまずかっただと思った。せつかく友恵が見送りに来てくれたのに優しい気持ちを傷つけてしまったようで修一は心の中で後悔した。

「友ちゃん、有難う。友ちゃんは心の優しい子よね」

曾祖母が修一の言葉を補うかのように友恵に言った。

「友ちゃん有難う」

修一も曾祖母の後から礼を言った。でも友恵は少し寂しそうな顔をしていた。

「修ちゃん、また来てよ。待ちゆつきに」

「うん。また来る」

「栗が採れたら大阪に送るきに」

「うん。栗を待ちゆつきに」

「修ちゃんも、まっこと土佐弁がうもったやいか」

友恵の顔に少し笑みが戻り、持っていた紙袋を修一に渡した。

「これ何？」

「見てみいや」

紙袋の中を覗き込むと中には真っ赤なホオズキが沢山入っていた。

「ホオズキよね。安芸に戻ったら、ホオズキ鳴らすが練習しいよ」

「うん。でも出来るかな」

「鮎を突くがよりは易しいき、すぐに鳴らす事が出来るようになる
ちや」

修一は友恵にそう言われて少し複雑な気持ちになった。

「友ちゃん、有難う。安芸に戻ったら練習するから」

遠くからトロツコの気動車の鳴らす汽笛の音が聞こえてきた。曾祖母は線路

の横に立ち北の方角を向いてトロツコが来るのを待ち、トロツコが見えると

運転手に向かって手を大きく振った。するとトロツコはスピードを次第に落

とし曾祖母の立っている近くで停車した。トロツコは気動車の後ろに原木を

満載した貨車を四、五両連結し、一両だけ人を乗せる客車になっていた。客

車といつても普段は原木を積む為の貨車で屋根も椅子もない手摺だけを取り付けたもので、乗客は新聞紙などを敷いて座ったり、手摺に掴まり立ったりしていた。

「安芸まで二人お願いしますき」

曾祖母は運転手にそう言つて後方の車両に修一と乗りこんだ。二人が乗つたのを確認すると、トロツコは汽笛を鳴らし再び走り出した。

「友ちゃん、有難う。また来るから」

修一は友恵に手を振つた。

「また、来いよ。待ちゆうきに」

友恵も修一に手を振りトロツコが山影に隠れ見えなくなるまで見送つていた。

修一は友恵の優しい気持ちを思うと何故か愛しくも思えてきた。

「友ちゃん、有難う。また必ず来るから」

修一は心の中で再び友恵に言った。

トロツコは伊尾木川に沿つて山間の細い線路を安芸に向いゆつくりと走つて

行つた。溪谷を走り、細い鉄橋を渡り、修一には全てが新鮮でスリルが有つ

た。トロツコが安芸の停車場に到着すると、曾祖母は近くの知り合
いの店で
電話を借り祖父に迎えを頼んだ。暫くして祖父は何時ものようにリ
ヤカーを
繋いだ自転車で迎えに来た。

「お母さん、ご苦労さん。トロツコに乗るがも、えらかっつろっ」

「これ位何ちゃあやないきに」

「修ちゃん。黒瀬はどやったぞね」

祖父が笑顔で修一に訊いた。

「楽しかった。トロツコに乗るのも面白かった」

「修ちゃんはトロツコは初めてながやったかね？」

「うん、初めて」

「今度来た時、また乗ったらえきに」

祖父は荷物をリヤカーに積み曾祖母と修一が乗ると自転車を漕ぎ家
に向かっ
た。

十四、西のおんちゃんと町の将来

「お母さん、久しぶりです」

家に着くと祖母が玄関先に出て来た。

「修ちゃん、黒瀬は楽しかったかね。えろう焼けちゅうが」

「伊尾木川で泳いだから」

「そうかね、それは楽しかったね。鮎は突けたがかね」

「あかんかった」

「黒瀬の鮎は太いきに突くがは難しいろう」

祖父が横から言った。

「そうそう、雄助さんが朝方寄ってよ、今日の夕方に來るて言いつた。今

晩はここで泊って黒瀬へは明日歸るがやと」

祖母が曾祖母に雄助の事を話した。

「ほいたら、今晚は雄助に何かご馳走でも作っちゃっとうせ。それと酒は余り飲まされんぞね」

「はいはい。何が良えろうね。修ちゃんは何が食べたいがかね」

祖母が修一に訊ねると、

「何でも構^{かま}んきに言うてみいや」

祖父も修一に言った。

「かしわ以外やったら何でもええ」

修一は鶏肉が大の苦手であった。安芸の家や、黒瀬の母屋では来客が有った

時などは鶏肉の鍋料理が定番で、その都度、鶏小屋から玉子の産みの悪い鶏

を出して来て漬していた。修一はその漬す様子を何度も見ているので、どう

しても食べる気にはなれなかった。かしわと聞いただけで絞めて血を抜き水

に漬けて羽をむしられ鳥肌が立ち吊された姿を思い出した。何時かも親戚が

集まって囲炉裏を囲んでの鶏鍋の時に鍋から赤い鶏冠が出てきた時など、修

一は今まで食べたものを戻しそうになった事が有った。

「修ちゃんはかしはが嫌いやったがやね。ほいたら修ちゃんには魚^{ひんび}でもする

かね」

祖母が修一に言うと、

「あんな美味いもん修ちゃんは どうして食べれんろうね」

祖父が不思議そうにしていた。

「お母さん。上がって寛いどうせ」

祖母が曾祖母に言つと、

「照子。黒瀬の畑で採れた野菜を持って来たき」

曾祖母はリックサックを祖母に渡し居間の方に上がって行った。

「お母さん、どっさり入っちゅうね。重かつつろつに。有難うござ
います」

祖母はリックサックを受け取り土間に戻って行った。

修一は裏の畑から好物のトウモロコシを？いで七輪で焼いて食べ、
その後、
溜まっていた夏休みの宿題に取り掛かった。しかし、根気が続かず
飽きてく
ると武の事が気になり久し振りに向かいの武の家を覗いた。

「武ちゃん。居る・・・？」

「修ちゃんかね。武は昼前から泳ぎに行く言つて出たままで、まだ
戻つてこ」

んが。何処までいつろつ。何時も鉄砲玉やきに困つたもんよ」

奥から武の祖母が出てきて修一に言った。

「そしたら、また来ます」

「御免よ。せつかく修ちゃんが来てくれたがやにね。武が戻ったら、修ちゃ

んが来てくれちよつたて言うちよくきに」

修一が帰ろうとした時、和食屋の分店の角で“つんがけ”の竿と水中メガネ
を持った武の姿が見え、修一の姿を見付けるとニコニコしながら走
つて来た。

「修ちゃん、黒瀬から戻って来たが？小母さんが黒瀬の母屋に行っ
たきにて
言うちよつたが」

「うん。今日戻って来た。何処でつんがけしてたん？」

「安芸川の上よ。^{かみ}今日はどっさり取れたきに。ほら、見てみいや」
修一が武の腰の魚籠^{びく}を覗き込むと二十匹以上の鮎が入っていた。

「安芸川の鮎はこんまいけど、黒瀬には太い鮎が居るて言うつが。
黒瀬の
川では鮎を突いたがだよ？」

「突いたけど、あかんかった」

「ほいたらよ明日も昼から“つんがけ”に行くき、修ちゃんも一緒
に行たら
ええわや」

「うん。そうする」

修一は“つんがけ”を楽しみにしていた。

夕暮れ時に雄助が用事を済ませてから祖父の家に戻ってきた。

「今晚は厄介になるきよ」

「何ちゃあ、遠慮せだち構うもんかよ」

祖父が雄助に言った。

「和姉も来ちゆうろう。修ちゃんも一緒に戻って来たがやるうか？」

「二人ともトロツコで午前中に戻ったぞね」

「そうかね。ほいで和姉は？」

「母はさつき駅の西に在るお不動さんにお参りに行く言っ出て出かけたが。も

うすぐ戻るろうと思っけんど」

「ほいたら、上^あがらいてもらっつかのし」

雄助はそう言って、居間の囲炉裏端に座ると、腰に差し^さしてある煙管^{きせのび}容れから

煙管を取り出し、刻み煙草を詰めて吸いながら祖父と話し始めた。

「今日はまっことだれこけたぜよ。知り合^あいから柚^ゆの酢^すが残^{のこ}っちよ

たら分け
てくれんろうかて頼まれてよ。この時期、袖の酔らあ残っちゃせん
けんど。

たまたま二本有ったきに、届けに行たわ」

「それはたいそうな事で」

「ほいたらよ、向こうも喜んでよ、これでタタキが食べれる言うて
ついで

やきにタタキを拵こぎえてくれてよ。ほんでよ、また一杯やって行け言
う事にな

って、さっき迄ぎっちり飲みよったがよ」

「雄助さんも、それは楽しみな事で」

「まっこと昼の酒は利くき、いかんぜよ」

「雄助さんは何ぼ飲んだち酔わんろう」

「そんな事は無いわや。もう歳ぞね。昔と比べたら弱よをうなったわ
や。雄次

さんの方が、まだ結構行けるろう」

「そんな事はない。元々わしは宮崎からここに婿よに来たがやき
に、土佐
の人程酒は飲めんぜよ」

「雄次さんはもう何十年も土佐に住んじゅうがやきに、立派な土佐
の人間よ
ね」

祖父と雄助が話をしているところに風呂から上がった修一が顔を出した。

「おんちゃん。こんばんは」

「修ちゃんかね。黒瀬は楽しかったかよ」

「うん、楽しかった」

「修ちゃんが帰^いんでしもうたら友恵も寂^いしがるに」

「友ちゃんはトロツコの処まで見送りに来てくれた」

「そうかね。友恵は修ちゃんが帰^いんで寂^いしいながやる。せかつく黒瀬に来た

がやに、まっと居れば良かったに。ほいたら友恵も夏休みの遊び友達が出来
て良かったるうに」

「また来年も帰^いって来ます」

「そうかよ、楽しみにしゆうぜよ。来年は修ちゃんはまっと大きゆうなっち
ゆうろうね」

「そうよね、子供は大きゆうなるのが早いきに」

「雄次さんも、楽しみな事よ」

「雄助さんも、そうよね。お互い孫が大きゅうなるがを見るがは楽しみなも
んぜよ」

間もなくして曾祖母がお参りから帰ってきた。

「雄助、来ちゆうがかね」

「和姉、ちつと前に来たがよ」

「もう、飲んじゃあせんかよ。余り飲まれんぜよ」

「何ちゃあ、飲んじゃあせなあや」

雄助はそう言つて「今は・・・」と付け加えた。

「そうかね、それにしても顔が赤いが」

「昼にちつと知り合いくでよばれただけぜよ」

「ちつとやなかるうがね」

「そんなこたない、ない」

「ほいたら、ええけんど。おまんも歳やきに、あまり無茶をせられんぜよ」

「それ位は心得ちよらあえ。ほいでよ、和姉は何時からお遍路に行くがぜよ」

雄助はばつが悪くなり曾祖母のお遍路の話 시작했다。

「四、五日してから行くこうかと思ひゆうがやけんど」

「そづかのし」

「留守の間は村の事と母屋の事はおまんに頼んだきに。こちゃん
面倒を見
ちやつとうせよ」

「うん、分かつちよらえ。けんど、母屋は健一夫婦が確りやりゆう
き大丈夫
よね。夫婦でうまくやって行かあよ」

「修ちゃん、食事の仕度が出来たき、お膳を出すを手伝うとうせ」
土間にいた祖母が修一を呼びに来たので修一は土間に行き祖母の手
伝いを始
めた。

食事が一段落してからも祖父と雄助は夏場の火の無い囲炉裏端で杯
を交わし
ながら話しに夢中になっていた。

「近々、安芸の町にもバイパスが通るて言つうが」
祖父が雄助に訊いた。

「そつよね。江湖川の北にバイパスが通るて言いよつたが。そやき
に役場や」

警察も皆北に移るがよ」

「ほいでよね、徳島から室戸と高知にかけて、鉄道の工事也开始するらしいが。

バイパスも鉄道も出来て便利に成るろうけんども、町や村もどんどん変わっ

て行くろう」

祖父は心配していた。

「そうよね。安芸もこれが変わって行くにかあらんぜよ。これも時代の流れ

よ。若いもんが都会に働きに行てよ、都会の方が便利や言つて戻つてこやせ

な。ほいで、田舎は後継者がおらんなる。まっこと困ったもんよ。黒瀬や近

くの村も残こつちゅうもんは皆年寄ばかりになるぜよ。土佐は食べ物も酒も

美味いけど、若いもんに仕事が無いきにいかなあよ」

雄助も将来を心配していた。

翌朝、修一が起きた頃には雄助は朝食を済ませ帰り仕度をしていた。

「雄助。昨日は大分と飲みよつたが。酒が残ちやあせんかよ」

曾祖母が雄助の顔をみて言つと、

「和姉。そんなに飲んじゃあせなあや。何ちやあ残つちやあせん」

「ほいだらええけど。自転車やきに途中でこけなよ」

「大丈夫よね」

「ほいでよ、何遍も言つようやけど留守の間、村の事はおまんに頼んだきに」

「心得ちよらあえ。和姉も気を付けてお遍路に行つとせよ。和姉も歳やきに」

「歳やきには余計よね」

「雄助さん。気を付けて。また来とせよ」

祖父が雄助に挨拶をすると、修一も雄助を見送りに玄関先に出てきた。

「おんちゃん、黒瀬に帰るの？」

「そうよね。早よういで、田の仕事を手伝つちやらないかんきに」

「修ちゃんもまた黒瀬にきいよ」

「はい」

「大阪にいたら皆さんに宜しゅうに言つちよいてよ」

「はい」

「修ちゃんも元気でやりよ。勉強もしつかりせないかんぜよ。でも、安芸に

おる間は盛大遊んでいたらええわや。大阪ではなかなか安芸みたい
なくて遊

べんろつきに。土佐はまっこと良^ええ処^ぜぜよ」

そう言つて雄助は自転車を漕いで戻つて行つた。自転車の荷台の木
箱の中に

は酒の一升瓶が六本積んであり、それを見て祖父が一言言つた。

「雄助さんも、まっこと酒が好きぜよ」

十五、蜂の巣と釣り

修一は午後から武とつんがけに行く事になっていたので午前中は夏休みの

宿題帳をしていた。昼前になり勉強も飽きてきた頃、友恵から貰ったホオズ

キの事を思い出し試してみた。しかし、いくらやっても友恵のようにはうまく

鳴らす事が出来ずにいると、それを見ていた祖母が修一に言った。

「修ちゃん、かいてみいや。どら、お祖母ちゃんがやってみちゃうきに」

祖母は上手くホオズキを鳴らした。

「お祖母ちゃん上手いなあ」

「そらそうよね。年季がいつちよらえ」

そう言っつて祖母は得意そうな顔をして土間の方に戻って行った。

修一は昼食後に武の家に行くつもりでいが、この日は武の方から修一を迎えに来た。

「修ちゃん、つんがけはまた今度にすらあ」

「ええ……」

修一が残念そうに武に言うと、

「昨日のつんがけで背中が焼けすぎてよ、ヒリヒリして痛とつてかなわんが

やき。ほいでよ代わりに江湖川に釣りに行こちや」

「そしたら、釣竿を取ってくるから」

修一は急いで井戸端から釣竿とバケツを取ってきた。

「先に、餌を取りに行くき」

釣りの餌は蜂の子を使うので、蜂の巣探しから始めた。夏場の家の軒先には

蜜蜂の巣が一つ位はぶら下がっていて見付けるには苦労はしなかったものの、

巣を叩き落すのが大変で、巣の周りを蜂が飛んでいない時を見計らい釣竿の

先で叩き落すのであるが巣が地面に落ちた瞬間に巣の中から蜂が飛び出して

刺される事も有った。叩き落すのは何時も武の役割で、修一は少し下がって

見ているだけで、幸い修一は今まで刺された事はなかったが武は稀に刺され

る事が有り、刺された痕には数ミリ程の針が一本刺さった状態で残っていた。

「おまんら、そこで何をしゆうぞね。危ないきに悪させられん」

そう言つて、家の住人に見付かり怒られる事も度々で、毎年、修一

が大阪に
帰る頃には殆どの巣が家々の軒先から無くなっていた。

修一は武と東浜八幡神社と妙山寺の近くの家々の軒先を見て回った。

「武ちゃん、あそこに一つ有る」

修一が直径十五センチ程の巣を見付けた。

「あの巣は太いにや。どっさり子が入っちゅうにかあらん」

「大丈夫かな、武ちゃん」

修一は心配して言うと、

「ちつと様子を見るきに。まだ、蜂が二、三匹巢の周りを飛びゆうきに。お
らんかったら落とすき待ちよってよ」

暫く様子を見て巢の周りを飛んでいる蜂が居なくなつた隙に武が巢を叩き落
した。

「おおの痛い！ 刺されたちや」

巢を落として直ぐに武が叫んだ。

二人は落とした巣をバケツに入れ一目散にその場から退散した。江
湖川に行

く道々、武の刺された腕を見ると針が一本刺さり周りが赤く腫れていた。

「武ちゃん、大丈夫か？早ようシヨンベンかけや」

蜂に刺されるとアンモニアが利くとの事で、武は何時もシヨンベンをかけた。

「おおの痛かった。けんど針も抜いてシヨンベンかけたきに大丈夫よ。びつ

くりしたぜよ」

武はさすがにけろっとしていた。

二人は土井橋から少し川上に在る妙山寺の裏手に行き釣り始めた。暫く釣を

していたが、釣れる気配がなく、徐々に川上に場所を移して行き、

先日修一

が蜆を取った場所の近くまで来た。

「いかにゃ、何ちゃあ釣れん。場所が悪いにかあらん」

そう言って武は川にざぶざぶと入り向こう岸に渡り修一も後に付いていった。

「もっと、下^{しも}がええにかあらん」

二人は土井橋まで下り、橋の手前から橋の下辺りに糸を垂らした。すると十

センチ程のハヤを武が立て続けに三匹釣り上げ、修一も一匹釣り上

げた。二人はそれから暫く釣りを続けていたが、結局その日の成果は武が六匹、修一が三匹だけだった。

「いよいよ今日はいかんにゃあ。また明日にすらあ」
成果にガツカリしながら二人は帰って行った。

釣りから帰ると井戸端に水をはったバケツに五、六十センチ程もある大きな鯰が入っていた。まだ生きていて髭の生えた口を大きく開けた顔で睨み付けているようで気味が悪かった。

「修ちゃん、帰ったがかね」

祖母が土間から出て来た。

「どうやったぞね、今日の漁は」

「ハヤが三匹だけやった」

「ほいたら鶏にやっとうせ。修ちゃんが釣ってきたがやきに鶏も喜ぶろっ。」

安芸の川には修ちゃんに釣られる魚も居るがやね」

祖母が笑いながら修一に言った。

「この鯰どうしたん」

「ミツチャンくのお父さんが釣ったがやと。ほいで修ちゃんに食べてもろう」

てて、さっきミツチャンのお母さんが届けに来てくれたがよね。暫く泥を吐

かさないかんきに、明後日頃あついでに鍋にでもするかね」

修一はこれを食べるのかと思うとゾツとした。「絶対、食べへん！」と心の中で決めた。

十六、薫的さんとホットケーキ

翌朝、修一は久しぶりに和食屋分店の横で行われているラジオ体操に顔を

出した。近所の子供達に交じり武とミツチャンも来ていた。

「武ちゃん、おやよう。ラジオ体操は真面目に出てるんやな」

「そうよね。おら、真面目やきに」

武はそう言って、自慢そうに出席票を見せた。

「修ちゃん、おはよう」

ミツチャンも修一に挨拶をした。

「ミツチャン、おはよう」

修一は自分の顔が赤くなるのを感じた。

「修ちゃんはお盆過ぎまで安芸に居るがやとね」

「うん」

「大阪に帰るまで盛大武ちゃんと遊んで行きよ」

そう言ってミツチャンは家に帰って行き、修一はミツチャンの後姿を見送った。

「修ちゃん。ミツチャン綺麗ろう」

武が突然修一に言った。

「安芸の中学校でも美人で評判ながやきに」

修一は武の言葉を聞いて胸がドキドキしてくるのを覚えた。以前のようじ、

もう一緒にミツチャンと遊ぶ事は無いのかと思うと、修一は何故か寂しい気持ちに成った。

「修ちゃん、御免。今日、急に室戸の親戚に行く事に成ったがやきほいで

今日は一緒に釣に行けなくなったがよ。明日は戻って来る予定やきに。戻っ

たらつんがけにも必ず行くきに堪えとうせよ」

「うん。分かった」

修一は少しガツカリしたが、午後から一人でつんがけに行こうかとも思った。

ラジオ体操から戻ると祖母が修一に言った。

「修ちゃん。曾祖母おばあさんがこれから高知の薫的さんにお参りに行く言いつが、

修ちゃんも一緒に連れて行って貰もらうたらどうぞね。修ちゃんが行くがやっ

たら、帰りに高知のデパートの食堂で馳走してくれて言ゆっけんど」

曾祖母や祖母達はデパートを何時もデパートと言っていた。修一はつんがけ

か、曾祖母とお参りに行こうか迷ったが、結局その日はデパートの食堂に釣

られ、曾祖母のお参りのお供をする事にした。

薫的さん、即ち薫的和尚は高知では昔から多くの信仰を集めていた。元々は

禅宗の僧侶で一六七一年に冤罪で藩主山内公の命で投獄され非業の死を遂げ

た。薫的和尚の死後、山内家に災いや怪奇現象が生じた為、僧侶でありなが

ら神として祀られている。当初は高知市の洞ヶ島ほらに有った瑞応寺に祀られて

いたが、明治の神佛分離令と廃仏棄釈で瑞応寺が廃寺となり、薫的神社とし

て新たに祀られている。曾祖母は薫的神社も大事やが、東隣りの安楽寺の境

内の西にお奉りされている薫的さんが本筋と言っていた。

曾祖母と修一は早速高知に行く事となり、祖父のリヤカーで安芸駅まで送っ

てもらった。

「修ちゃん。途中で迷子にならんように、曾祖母おばあさんにくっ付いちよかない

かんぜよ」

「うん。大丈夫や」

「曾祖母ひいばあさんに高知でうんとおいしいもん食べさせてもらいよ。ほいたら、

お母さん、気を付けて行ってきとうせ。修一を頼みましたきに」

「ほな、夕方には戻れると思うき」

土佐電気鉄道安芸線で後免駅まで行き、後免駅から土讃線に乗換え
て高知駅

まで。高知駅から洞ヶ島までは1キロ足らずの距離で、修一はバス
に乗るの

かと思っていたが、

「お遍路さんは、歩くもんよ。ほいで修ちゃんらあのように若いも
んは盛大

歩いて足を鍛えないかんきに」

と言って、結局歩いて行くことになった。駅前の南の通りを西に向
かって歩

くと左前方に高知城の天守閣が見えた。更に歩いて行き寿町を過ぎ
た辺りが

洞ヶ島で、通りを北に曲がり進むと突き当たりに薫的神社が有った。

「修ちゃん。前にも来た事が有るき覚えちゅうろつ」

「うん」

と言ったものの修一はよく覚えていなかった。曾祖母と修一は鳥居

を潜り、

お社の前でお参りを済ませてから東隣の安楽寺に向かった。安楽寺の山門を

入り左奥の別棟の入口を入れて行くとそこにも薫的さんがお奉りされていた。

曾祖母はこの寺とは昔から懇意のようで、入口からスタスタと本堂に上がり

お経を唱え始めた。修一は曾祖母の後ろに正座して座っていたが、お経が余

りにも長く足が痺れてしまった。やっとの事でお経が終ると修一は足が痺れ

て立つ事が出来ずに足を伸ばして痺れが治まるのを待った。

「修ちゃん、大丈夫かね」

「痺れが切れて動かれへん」

「おでこに唾を三遍付けてみいや。直ぐに治まるきに」

修一は曾祖母の言うようにおでこに唾を三遍付けてみたが一向に治まらな

った。間もなくして住職が本堂にお茶とお菓子を持って挨拶に来た。

「岩崎さん。久しぶりです。お元気そうで何よりです」

「ご住職もお元気そうで」

「この子は誰やっつろっ？痺れが切れたがやね。まあ待ちよってみいや。す

ぐに治まるきに」

修一は足を伸ばしたままでいた。

「見つともない格好で申し訳ありません。私の曾孫ですらあ。夏休みで大阪からもんできちゅうがです」

「そうでしたか。岩崎さんの曾孫さんやき、確りした顔をしちゅうぜよ。僕、

このお菓子食べたらええきに」

そう言つて住職が茶とお菓子を勧めた。

「お参りに寄せてもろただけやきに、何ちゃあ構わんでつかあさい」

「仏様のお下がりがやきに遠慮せずに食べとつせ。これもご供養やきに。僕、

そのお菓子は野根饅頭で高知の名物やきにね、美味しいぜよ」

「修ちゃん、ほな頂きなさい」

「ありがとう」

修一は住職に礼を言つて野根饅頭を早速食べ始めた。

「岩崎さん、またお遍路に行くがかね」

「はい。四、五日中にはと思ひよつたけど、この子がお盆過ぎまで安芸に

居るきに、この子が大阪に戻つたら回り始めようかと思ひゆうがで

す

「岩崎さんも曾孫さんが大阪に帰ると寂しゅうなるね」

「まあ、毎年学校が休みの時は帰えって来てくれるきに、それが楽しみです

らあ。何時もやったらこの子の母親が連れてもって来るがですけど、今年

は母親が用事が有ってどうしても来れん言つて、ひとりでもんてきたがです」

「僕。ひとりで大阪からもんて来たがかね。偉いもんよね。こりやまっこ

と確りしちうぜよ。盛大お菓子を食べよ。何ちゃあ遠慮はいらんきにね」

「はい」

野根饅頭は粒が小さく、修一は一度に三つずつ口に頬張った。

「ほいで、今回はお遍路に出る前に薫的さんにお参りしちよこ思つて寄せて
もろたがです」

「岩崎さんも熱心なきに。でも余り無理はせられんぞね。若いもんでも歩き

遍路は大変ながやきに。もう錦の納札やないかね」

「いやあ、とんでもないです。まだ銀の納札ですきに」

「銀の納札でも大したもんぜよ。なかなか普通の人じゃやれるもんやないぞね。昔、岩崎さんが三十六番の青龍寺で水行をしようたがをよう知つちゆうきに」

修一は横で野根饅頭を食べながら話を聞いていて、曾祖母はそんなに偉いのかなと思った。でもこの野根饅頭は確かに美味いと思った。既に菓子鉢は空っぽになっていた。

「ご住職は何時からお四国を回られるご予定ながです？」

「ここ暫くは法事が立て込んじゅうきに、何時になるかはまだ分からんがよ。檀家の人達からも先達になって早ように連れていてくれんろうかて頼まれゆうがやけんど。その内にまた段取りして行かあよね」

「そうですか。今回は逆打ちしますきに、何処かの札所でご住職にお会いするかもしれませんな。楽しみにしよります」

曾祖母と住職は札所の話をしているが、修一はそろそろ退屈になってきた。

「ほな、そろそろお暇やすみします」

「別に今は無い」

「ほうかね。ほいたら、デパートの食堂で何か食べて帰るかね」

「うん。それがええ」

修一にとっては今日一番の楽しみであった。曾祖母と修一はデパートの食堂
の前で見本の並んだ棚を眺めた。

「修ちゃんは何が食べたいがぞね」

「沢山有って決めにくいな」

「何でもかまんきに言いや」

「うん」

「曾祖母おばさんは、おうどんにするき」

「そしたら、僕は・・・ホットケーキにする」

「それだけで、ええがかね」

「うん。ホットケーキでえい」

修一は大阪でも母親の買い物に梅田のデパートまで付いて行く事があり、買
い物の後にデパートの食堂で食べるが楽しみであった。何時か見本の並んだ

棚の中でざる蕎麦を見てすごく量が有るように思え、注文してから、いざ来てみるとお蕎麦の下は簞す子で、その下が空洞くわうになっていてガツカリした事が有った。間もなくして、うどんとホットケーキを女店員が運んできた。

「修ちゃん、箸はいらんがかね。いるがやったら店の人に頼んじやうけんぞ。」

西洋箸では食べにくいろう」

「ホークとナイフやで。使った事があるから平気や」

「そづかのし」

「その何たらケーキはおいしいがかね」

「うん。すごくおいしい」

「ほいたら、曾祖母おばあさんに一切れ食べさしとつせ」

「うん。そしたら、これ」

修一はホットケーキを大きく切り、蜂蜜をタップリと付けてホークに刺して

曾祖母に渡すと、曾祖母は嬉しそうにそれをゆっくりと味わうように食べた。

「曾祖母おばあちゃん。おいしいやろ？」

「まつこと、これは甘くて美味いが。修ちゃんは優しい子だね」

曾祖母にそう言われて修一は照れくさかった。

「修ちゃんは大阪でもこの何たら言うケーキを食べゆうがかね」

「ホットケーキや」

「その、仏さんのケーキを」

「仏さんのケーキでなくてホットケーキ！」

「仏さんのケーキやないがかね。難しい名前が付いちゅうもんよね。まあ、

おいしいき、名前はごつでもええわや」

「大阪でも食べてる。デパートの食堂なんかで。お母ちゃんも時々家は家で作

つてくれる。でも、やっぱりデパートの方がケーキがフワフワしてて、蜜も

甘くておいしいは」

「お母さんにそんな事言われんよ」

「言うてへん。言ったら作ってくれんなるさかい。でも、やっぱりデパート

のホットケーキの方が美味しいなあ！」

修一はホットケーキを食べ終り、曾祖母に礼を言った。

「曾祖母ちゃん、おいしかった。有難う」

「そうかね。それは良かったよ。こんな事はめったに無いきにねえ」
「他に何か食べたいものはないがかね？」

「もおえい」

本当は他の物も食べたかったが、ホットケーキとお寺で食べた野根饅頭で満腹になっていた。

「ほいたら、そろそろいぬるかね」

曾祖母と修一は、はりまや橋に出て高知駅まで歩いて行った。安芸駅から家までは歩いて帰る事にした。駅前の通りを横切り、自転車預かり所の角を右に曲がり本通りに出た。通りは薄暗くなり所々に街灯が点り、人通りも疎らであった。潮の香りと微かな波の音が聞こえていた。

「修ちゃん、この通りの町並みをよく覚えちよきよ」

「どうして？」

「修ちゃんが大人になった頃には、うんとこの町も変ちゆうきに」

「そやろか」

修一はこの町並みがとても好きで、子供心にこれからも変わらずにこのまま
で有って欲しいと思っていた。

「バイパスが出来るきにね。これからは北の方が盛んになるにかあらん。バ

イパスが出来たら、川向こうの田んぼや畠も皆のつなるが」

日頃から田畑の恵みを肌で感じている曾祖母は寂しそうに言った。

修一は江

湖川の岸から見る景色を思い出した。今の修一にはこの町全体がこの先どの
様になるのか想像が付かなかった。

十七、鯨のお汁とお盆の話

「帰ってきたかね。」

祖母が玄関先まで迎えに出て来た。

「曾祖母おばあさんも疲れやせざったかね」

「何ちゃあ、これしきで疲れるかよ」

「修ちゃんはどうやったぞね」

「うん。楽しかった」

「高知で曾祖母おばあさんにええもん食べさせてもらったかね」

「うん。ホットケーキを食べた」

「そら良かったね」

「照子。あの何たらて言うケーキは蜜がかかったよちよて甘くて美味しいぞね」

「曾祖母おばあさんも食べたがかね」

「修ちゃんのを一切れ貰うつて食べたけど。まっこと甘くて美味かったぜ」

「よ」

「そうかね。それは曾祖母おばあさんも良かったね。お祖母ちゃんも食べたかった

よ。曾祖母おばあさんは、

今日は曾孫に引かれて薫的あつちさん参りやったね。楽しかったろう」

「何ちゃあ・・・」

曾祖母は曾孫と一緒に高知までお参りに行けたのでとても嬉しそう
で、珍し

く照れたような顔をした。

「修ちゃん、お風呂が沸いちゅうきに、先に入りや。お祖父ちゃん
も修ちゃん

と一緒に入るて言うて楽しみに待ちゅうきに」

「うん」

「お風呂が済んだら晩御飯やきにね」

修一と祖父が風呂から上がると食事の支度が出来ていた。

「お風呂に入ると気持ちがええろう」

祖母が修一に言った。

「うん。気持ち良かった。明日は僕が薪割りするから」

「修ちゃんがしてくれるがかね。それは助かるぜよ」

祖父が嬉しそうな顔をした。

「今日は、修ちゃん、大分と歩いたろうきに、お腹が空いちゅうろ
う。盛大
食べよ」

祖母がお椀に魚の切り身の入ったお汁を渡した。

「お祖母ちゃん、安芸のご飯はおいしい。このお汁もおいしいは」
「そうよね。ご飯は薪で圧力釜を使って炊きゆづがやきに。おいし
いに決ま
つちゅう」

「大阪の家はガスで炊いてるからなあ」

修一は本当に田舎の炊き立てのご飯は美味いと思った。

「曾祖母つばあばさんも食べとつせよ。けんど、曾祖母つばあばさんもあまり無理せ
られんぞ
ね」

祖母が心配そうに曾祖母の顔を見た。

「わしは普段から百姓仕事とお遍路で鍛えちゅうきに、そこいらの
年寄りに
は負けんぜよ」

「そんならええけんどね。そうよ、大事なことをばっさり忘れちよ
った。昼

過ぎに横山の博さんが近くに來たきにて寄つてくれたがやった。それを修ち

やんに言うがを忘れるところやったよ」

横山博は修一の父親のすぐ下の弟で父親が岩崎の婿養子になつたので横山を

継いでいた。安芸の保健所に技師として勤め、人の面倒見も良く家庭的で修

一には優しい叔父で、叔父夫婦には修一より一つ年下の文江と言う一人娘が

居た。

「皆さんお変わりないろうかて。ほいで修ちゃんが來ちゆう事を話したら、家うちんくに遊びに來るよに言うちよいてて言いよつたがやった」

「あ、そやった。博のおんちゃんの家に行くのを忘れてた。お母ちやんから

安芸に行つたら行くよに言われてたんやった」

「なんで、まっと早よに知らせてくれざつたて。ほいで、直ぐに知らせい
ですまん事でて謝つちよいたきに。修ちゃん、明日にでも行てき
や」

「明日、挨拶に行てきたらええわや」

祖父も修一に言つた。

「うん。そうする。明日、安芸川に行つた歸りに寄つてみる」

「明日も川に行くがかね」

祖母が呆れた。

「うん。つんがけに行く」

「そろそろお盆も近こう成って来たきに、お盆には川や海には行か
れんぞね」

「お祖母ちゃん。どうしてや」

「どうしてやち、お盆には仏さんが戻ってきてよね、また帰る時に
ご供物と

一緒に川に流すがやきに。その時に川や海で泳いだり、釣をしよつ
たら仏さ
んに一緒に連れて行かれるきに」

「そんなん迷信や」

「そんなこた無いぞね。年寄りの言う事は聞くんもんよね」

祖母はさらに続けた。

「前も、田野の親戚の子がお盆に海で泳ぎよって、お供物と一緒に
仏さんの

名を書いたお札が流れて来て、こんな物邪魔や言つて放り投げたと。
ほいた

ら、その晩から高熱が出て大事だいじながやったきに。そやきに修ちゃん
もお盆に

は川に行かれんぞね。ほいで川口にも行たらいかんよ。あそこは流れがよく
変わるきに。流れに足を取られ流されて溺れてのうなる人が居るが
やきに」

祖母は修一にこんこんと言い聞かせた。でも修一は、お盆過ぎには
大阪へ帰

るので、それまでは出来るだけ釣りに泳ぎにも行きたいと思っ
ていた。川

口は安芸川が海に流れ込む所で、以前から危ないから行くなと何
度も言われ

ていて、今まで行った事はなかった。浜に出ると東に川口の堤防が
見え、一

度は浜伝いに行つて見ようかとも思っていたが、まだ実行はしてい
なかった。

人から行くな、行くなと何度も言われると返つて興味が湧くのであ
った。

十八、博のおんちゃん

翌朝も修一は牛乳瓶の触れ合う音と鶏の鳴き声で目を覚ました。

井戸端に

行き顔を洗った後、鯰を入れてあったバケツが無くなっているのに気が付き、

土間で朝食の支度をしている祖母に鯰の事を訊いた。

「鯰は？」

「修ちゃん。昨日の晩、おいしい言つて食べたやいか」

修一は祖母が「泥を吐かせた後に鍋料理にでもするか・・・」と言つた事を

すっかり忘れていた。

午後に武の家を覗くと武はまだ室戸から帰っていなかったので、仕方なく修

一は一人で安芸川につんがけに出掛けた。

「お婆ちゃん。安芸川に行ってくる。帰りに博のおんちゃんここに寄つてくるから」

「気を付けて行きよ。余り深みには入られんよ。博のおんちゃんには宜しゆ

う言つちよいてよ」

安芸橋を渡る手前を上^{かみ}に百メートル程行ったところで町の子供達が

集まつて泳いだり、鮎こりを突いたりしている場所があり、修一もその近くでつんがけを始めた。水中メガネで覗き込むと鮎の群れやハヤの群れが泳いでいるのがよく見え、虹のような色をした鮮やかなハヤの姿も見えた。水は透き通り、潜つても遠くまで見通すことが出来た。やはり、鮎は伊尾木川と比べると小振りであつた。修一にも鮎の動きが大分と分かつてきて、竿の動かし方も当初よりは上手くなつてきた。些か小さめであつたが一時間程で五匹獲る事が出来、修一にとっては大収穫になつた。取り敢えずは収穫に満足し、叔父の家に行く事にした。

安芸橋から本通りを戻り、江湖川に架かる梶橋の手前を川に添つて二十メートル程下しもに行くと幅が二十センチ程の細い板を三本繋いで渡れるようにしてある場所がある。修一は安芸川への行帰りは、何時もその細い板を好んで渡る事にしてきた。修一にとっては小さな冒険でもあり、もつと幼かつた頃、この板を曾祖母に手を引かれて毎日渡つて通つた思い出があつた。梶橋の東に曾祖母の姉が嫁いでいる家があり、その姉は長らく病に伏せ、息子の嫁さんの面倒見が悪く、曾祖母が心配して毎日食事の世話をする為に昼

頃になると祖母の作った食事を持ってこの板を渡り姉の家に通って行った。

姉の家に着くと、曾祖母は奥の座敷で寝ている姉の枕元で食事をスプーンで姉の口元に持ってゆき食べさせた。修一は何時も曾祖母の側に座り食事が終わるのをじっと待っていた。まだ幼かった頃の修一には細い板の橋と曾祖母が姉にスプーンで食事を与えている姿が何故か強く印象に残っていた。

その細い板を渡り最初の辻を左に曲がり二十メートル程行くと叔父の家である。辻を曲がると叔父の家の前では叔父と従妹の文江、文江の友達数人が集まり話をしていた。修一が近付くと叔父が修一に気が付いた。

「修ちゃんやいか」

「こんにちは」

「おまん、まっと早ようにおんちゃんくに来ないかんが。昨日、たまたま、おまんくの家近くまで用事が有ったきに寄ったら、おまんくのお祖母さんから修一が来ちゆうて聞いてビックリしたぜよ。安芸にもんてきてから、毎日どつしよったぜよ」

「早く、来る積もりやったけど・・・」

「遊びほつけちよつたる」

「夏休みの宿題と釣と蝉取りとつんがけと・・・、ええとそれから黒瀬にも行つてた」

「おまんも忙しいのう。日に焼けて真つ黒になつちゆうやいか。去年よりまた背がのびちゆうな」

「うん」

「安芸は楽しいかよ」

「うん、楽しい！」

「そら、良かったぜよ。文江、おまんの従兄の修一よ。知ちゆうろ」

「うん、知ちゆう。こんにちは、修ちゃん」

「文江ちゃん。こんにちは」

「ほいたらちつと上がつて行きや。文江は友達と遊んじよつたらええきに」

そう言つて、博は修一を家の中に連れていった。

「房子。修一が来たきに」

「修ちゃんかね、よう来たね。待ちかねちつよたぞね」

「おばちゃん。こんにちは」

「昨日、家うちんくのお父さんから聞いたがやけど、まっとう安芸に来ちよったがやとね」

「はい」

「ほいたら、まっとう早ように、家うちんくに来たら良かったに。お父さんも修ちゃんに会うがを楽しみにしゆうがやに」

「房子、まあええわや。子供は遊びで忙しいながやきに。今日は修一がこち

やんと来てくれたがやき。何か修一に出しちゃっとうせ」

「何がええろね。芋ケンピが有るけど、修ちゃん食べるかね」

「はい」

「ほいたら、ちっとう待ってよ」

房子は台所に芋ケンピを取りに行き、直ぐに戻って来た。

「修ちゃんの口に合うろうかね。大阪では何時もおいしいケーキやお菓子を
食べゆつろつきに」

「芋ケンピは好きです。何時もお祖父ちゃんが送ってくれるんで大

阪でも
時々食べてます」

「そうかね。川島の芋ケンピやきにおいしいよ」

「おばちゃん。有難う」

「兄貴は元気でやりゆうがかね。仕事が忙しいろう」

博が修一に訊いた。

「はい。毎日忙しいみたいで・・・」

「これからどんどん自動車が増えるきに、お兄さんの修理工場も忙しゆうなるにかあらんね」

房子が博に言つと、

「まっこと、兄貴の商売はえいにかあらん」

博が納得したように房子に言つた。

「ところで、おまんは大きゆうなつたら何に成りたいがぞね」

「まだ、決めてない」

修一は考えてもいなかった。

「そうか。でも勉強はせないかんぜよ。ほいで、早ようと目標を持

たないか
ん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

修一は何も言う事が出来なかった。

「あんた。修ちゃんはまだ小学校の五年生やいか。将来の目標言う
たちまだ
早いちゃ」

「そんなもんやないぞね」

「修ちゃんもその内に、上級の学校に行たら自分で決めるように成
るるうき

に。あんたが何ちゃあ心配せだちかまわなよ」

「そうかにゃ・・・・・・・・」

博は少し不満気であった。

暫くすると従妹の文江が戻ってきた。

「文江。友達はどうしたか？」

房子が文江に訊くと、

「うん、さつきいんだ」

「一緒に遊びに行かざったがかね」

「うん、行かざった。用事があるがやと」

文江がつまらなさそうな顔をした。

「修ちゃん、久し振りやね。つんがけに行ちよったがかえ。魚籠びくに
こんまい

鮎あやが五匹入っちよた」

「うん」

「おまんは、つんがけが上手いながかえ」

博が修一に訊いた。

「あまり上手くはないけど」

「つんがけもええけんど、危ないきに余り深みにいかれんぞね」

博が心配して言うと、修一は皆が言う事は同じであると思った。

「はい」

「ほいたらよ、修ちゃんが安芸に居る間に、皆で大山へ貝獲りにで
も行くか
にゃ」

「お父さん、それがええわ。何時行く。早よう行きたいちや」

文江が喜んだ。

「何時がええろつにゃ」

大山は安芸の東に有る岬で、安芸の浜からは良く見えるが、修一はまだ行つた事がなかった。

「おまんは何時まで安芸に居るがで？」

「お盆過ぎまで居る予定です」

「ほうか。ほいたらよ、日を決めたらおまんに連絡するきに待ちよつてよ」

「はい」

修一は大山に行く楽しみが一つ増えた。

「今日は家うちんで晩御飯食べてからいんだらええきに、ゆっくりしていきよ。美味いもん作っちゃうき。どりゃ、ほいたら隣に行って玉子をもろおてくるかにゃ」

博はそう言って、隣の養鶏をしている博の叔父の家に出掛けた。修一はおかずがかしわでない事を心の中で祈った。

「修ちゃんは大阪で何時も何をして遊びゆうが？」

文江が修一に訊いた。

「三角ベースしたり、ベツタンしたり、公園の池で釣をしたり。夏はプールで泳いだりもしてる」

「ほいたら、男の子の遊びは安芸とえろう変わらんね。でもプールで泳ぐ事

は余りないきにね。男の子は川で泳いで鮎や鮠を突いたり、鰻を獲ったりし

ゆうきにね。女の子やち川で泳ぎゆうもんね」

「大阪は泳げる川が無いからあかん。夏はプールだけや。やっぱり

夏は安芸

に帰って来るのが一番や」

「修ちゃんも安芸の学校やったら良かったにね」

修一も実際のところ何故自分が安芸の小学校に行かなかったのか何時も残念

に思っていた。

間もなく博が隣の叔父の家から包みを抱えて戻ってきた。

「玉子をどっさりもろてきたは。ほいで生みの悪い鶏を潰した言うて、かし

はを分けてくれたき。これで、今晚はすき焼きをこさえちゃう。美

味いきに

楽しみにしよってよ」

博は楽しそうにしていたが、修一は困ったと思った。すき焼きは牛肉の筈で、何故鶏肉を使うのかも疑問に思った。このまま何かの理由を見付け帰える事が出来ないかとも考えた。

暫くして房子が食事の支度が出来たので皆を呼びに来た。大きな鍋に焼き豆腐、野菜、糸蒟蒻、鶏肉等が一杯入っていた。

「遠慮せんと盛大食べよ」

博は楽しそうに修一に勧めた。

修一は気付かれないように野菜や豆腐を食べて、暫くして大げさに言った。

「ああ、お腹が一杯になった」

「まっとな食べよ」

「もう、お腹一杯や」

「まだ、かしわが大分と残っちゅうが」

「おんちゃん。本当にお腹一杯や！」

「おんちゃんくに来たら遠慮はせられん」

「遠慮はしてへん」

「そうか・・・、ほいたらしかたないにや」

「文江も食べや」

「お父ちゃん、あてがかしわ嫌いなが知ちゅうろつ」

「そんでも、何時も好き嫌いしたらいかんて言うろつ。好き嫌いせずは何でも食べないかんて」

「修ちゃんやち、何ちゃあ、かしは食べちゃあせざつたに」

文江に見られていた。

「修一。おまんもかしはが嫌いながかよ」

「いや、もうお腹が一杯やから」

「修ちゃん、野菜とお豆腐しか食べちゃあせざつた。あてが見よつたきに」

修一は文江に完全に観察されていた。

「まあええやいか。好きなもん食べたら」

房子が横からそう言うてくれたので修一は助かったと思った。

「ただいま」

「修ちゃん、帰ったかね。博のおんちゃんくはどつやったぞね」

祖母が裁縫の手を休めて訊いた。

「うん、晩御飯食べてきた」

「そうかね。修ちゃんが来てくれたき喜くんじょったろう」

「うん」

「また、おんちゃんくに行てきたらええわや」

「こんど、大山へ貝獲りに連れて行つてくれるて言つてた」

「そら楽しみやね。何時行くがぞね」

「日が決まったら連絡してくれるて。鮎ここに置いとくから」

「何匹獲れたがかね」

「五匹」

「それはそれは」

修一は叔父の処の晩御飯のおかずについては祖母には話さなかった。

「夕方、武ちゃんが来ちよった。室戸から戻つたゆつて」

「武ちゃん、戻ってきたんやな」

十九、つんがけと鯨獲り

翌日、修一は午前中に勉強を早めに切り上げ薪割りを始めた。祖父には昨

日すると言っていたが、叔父の家から帰るのが遅くなり出来なかったので気になっていた。

「修ちゃん、やってくれちゅうがかね」

祖父は嬉しそうな顔をしていた。

「うん。昨日出来けへんかったから」

「無理せられんぞね。怪我でもしたら大事おまじごとやきに」

「うん」

勝手口の向こうの通りからは毎日魚を手押し車に積んで売り歩く真つ黒に日

焼けした行商の小母さん達の声が聞こえてきた。

「お魚いらんかね。取れ立ての新鮮なお魚なぞね」

「お魚いらんかね。びんびはいらんかね。おじゃこも有るぞね」

「今日はどろめも有るぞね」

近所の人達はその声を聞いて買いに集まっていた。この町には都会

に有るよ
うな軒を連ねた市場や商店街などが無く、もっぱら買い物は本通り沿いに
点々と在る個人商店が行商であった。通りには修一の祖母、武くのお婆さん、
ミツちゃんのお母さんや近所の人達が行商の小母さん達と買物がてら楽しそ
うに話しをしていた。

「お魚いらんかね。取れ立ての新鮮なお魚ぞね」

「お魚いらんかね。びんびはいらんかね。おじゃこも有るぞね」

暫くして、徐々にその行商の小母さん達の声が遠ざかって行き、祖母が勝手
口から戻ってきた。

「修ちゃん。おいしそうな鯛を売りよったきに買^こつてきたよ。今晚
修ちゃん
に食べらいちやうきに。楽しみにしよりよ」

祖母はそう言つて炊事場で鯛の鱗を取り始めた。

「ありや、玄関で声がしゆうが。誰か来たにかあらん。誰ぞね？修
ちゃん、
悪いけんど見てきとうせ」

修一は勝手口を抜けて通りから玄関に回った。

「修ちゃん、こんにちは」

「文江ちゃん。こんにちは」

「お父さんから修ちゃんに知らせとつせて頼まれたがやきに。明日、大山に

行く事にしたきにて。ほいで県交のバスで行くき、朝の九時にヤマ

ト前で待

ちゆつきにて」

「うん。分かった。有難う」

「ほいたら、あてはこれで帰るき。明日来てよ。楽しみにしゆつき」

「誰かね。ああ、文江ちゃんかね」

祖母も玄関先に出て来た。

「小母さん、こんにちは」

「文江ちゃん。上がってまっとゆっくりしていたらええに」

「小母さん。有難う。でもこれから友達んくに行くがやきに。明日、お父さ

んらあと大山に行くき、それを言いに来たが」

「それはそれは。せっかく来てくれたがやにねえ。お父さん、お母さんに宜

しゅう言つちよいてよ。明日は面倒掛けるねんど、修一の事をお願いします

きこつ」

「はい」

「文江ちゃん。ちっと待ってよ」

祖母は土間へ戻ってお菓子の包みを持ってきて文江に渡した。

「ちつとやけんど、友達と食べとうせ」

「小母さん。有難う。修ちゃん。ほいたら、明日待ちゆつきに」

文江がそう言って帰って行った。

午後、修一は武の家に行った。

「武ちゃん」

「修ちゃんかね」

「今日はつんがけどうする」

「これから行くけど、そつと行かないかんきに」

「武ちゃん、どうした」

「家うちんくのお祖母おばが『武は川にはっかり行きゆつ』『言いつてつるないながやき

に。直ただぐに準備して修ちゃんくに行くき、ちつと待ちよって

「うん。分わかった」

間もなくして武が修一を迎えに来た。

「今、お祖母おばが台所で用事を始めたきに急いで出てきたわや。早よう行こちや」

武と修一は急いで安芸川に向かった。安芸川では既に町の子供達が多勢来て泳いだり、鮎を突いたりしていた。

「今日はどっさり来ちゆうにや。ちつと上かみに行たがましにかあらん」

武と修一は川上に向って少し歩き、適当な場所を見付けた。

「ここやったらあまり人がおらんき、えいにかあらんよ」

二人は川に入り、つんがけを始め、二時間程で修一は六匹しか獲る事が出来なかつたが、さすがに武は二十数匹も獲っていた。

「修ちゃん、まだまだやにや。そろそろ、つんがけもだれたき、これから江湖の口に行てみるかよ」

江湖川の口は江湖川が安芸川に注ぎ込んでいる処で修一はまだ行った事がなかつた。

「武ちゃん。江湖川の口に何が有るんや？」

「うん。江湖川の口で大きな鯰が獲れるがやき。おんちゃんらあが仕掛けをして獲りゆうがよ」

武と修一は本通から梶橋の手前を江湖川に添って川下に歩いて行った。川の兩岸は葦が茂り流れは緩やかで、ここでも鰻を獲る竹筒の仕掛けが川底に何本も沈められていた。川口に近くなるに連れ川幅も少し広くなってきた。二百メートル程下った所で川の中に細く短い竹竿が点々と立ててあり、その竹竿の先から釣り糸が川の流れの中に垂れ下がっていた。

「修ちゃん、あれが鯰獲りの仕掛けよ」

「あれが？」

「そうよ。あそこにおんちゃんが居るろう。あのおんちゃんが仕掛けゆうがよ。あそこに魚籠たもが浸けちゃうろう。見よってよ、太いが入いっちゃうにかあらん」

修一は先日、ミツチャンの家から貰った鯰の顔を思い出した。

「餌は何？」

「分からんけど、蛙でも付けちゃうがやないろうか」

修一は蛙を食べた鯰を食べたのかと思うと少し気持ちが悪くなった。

「おんちゃんよ、獲れゆうかね」

武が仕掛けをしているおんちゃんに訊いた。

「おお、今日はまつこと食いが悪いにかあらん。さつき見に来たけど、二

匹しか掛かちやあせざつたよ」

「魚籠^{たも}見てかまんかね」

「構わなや。見てみいや」

修一も一緒になって魚籠を覗き込んだ。先日、家の井戸端のバケツの中に入

っていたのと同じ位の大きさを全く同じ顔をしていた。

「おんちゃん、でも太いやいか」

「何ちゃあ、ここにはまつと太いが居るがやきに」

それから暫く武と修一はそのおんちゃんが仕掛けを上げるのを見ていたが武

と修一が来てからは一匹も獲れなかった。

「今日はまつこといかんよ。そろそろいぬるかにや。また明日の朝にでも仕

掛けを見に来^くらあよ」

そう言つて、そのおんちゃんは鯰の入っている魚籠を担いで帰つて行つた。

「武ちゃん獲つた鯰はあのおんちゃんが食べるのやろうか」

「魚屋か料理屋にでも売りに行くがやないろうか」

「へえー。鯰も売れるんや」

「鯰も鰻も買う人が居るがやき。しやき、この川で皆仕掛けをして獲りゆうがよ」

江湖川の口は海に近く潮の香りが漂い、上げ潮になると微かに塩分を含んだ水がゆつくりと川上に向つて流れて行つた。夕方ともなり、陽も西に傾き川面を走る風が涼しく感じた。

「そろそろ、いのかにや」

武と修一は元来た道を戻り、梶橋の手前に有る細い板を渡つて歸つて行つた。

二十、大山岬

翌朝、予定の時刻の少し前にヤマト前のバス停に行くとき博と房子、文江が既に来ていた。

「おはようございます」

修一が挨拶すると、

「おはよう。今日はお天気でまっこと良かったよ」

博が修一の顔を見て楽しそうに言った。

「修ちゃん、おはよう。お父さん、昨日から楽しみにしよったがやきに。お

弁当もどっさり作ってきちやうきに食べてよ」

房子が笑顔で修一に言った。

「修ちゃん、昨日もつんがけに行ちよったろう」

文江が修一に突然言った。

「あて、昨日友達と泳ぎよって、修ちゃんがつんがけの竿を持って上の方へ行くかを見たがやきに」

「声を掛けてくれたら良かったのに」

「いやちや。友達と一緒にがやつたに」

「毎日、釣やつんがけに行て、おまんは漁師にでもなるがだよ」

博が冗談を言った。

室戸方面行きの県交のボンネットバスが到着し、博の家族と修一は
大山へ向
かった。

大山は岩場が多く小学生にとっては絶好の磯遊び場であった。岩場
の潮溜ま

りには図鑑で見るイソギンチャク、ヒトデ、ナマコや小さな蟹など
が生息し、

岩にはカサガイやフジツボなどが沢山張り付いている。海に潜れば
大きな貝

などが獲れるが、叔父からは小学生には危ないからと止められてい
たので岩

場の潮溜まりでカサガイなどを獲る事にした。西の方角を見ると安
芸の海岸

線がパノラマの様に広がり、町で一番高い電話局の建物が見へ、沖
合では数

隻の小さな漁船が網を引きながら漁をしていた。

「修ちゃん、どっさり居るね」

文江が岩場の潮溜まりを見て言った。

「うん。でもあまり大きいのが居らん」

「こんまいがあでもかまんやいか」

修一は暫く岩場で貝獲りをしていたが、単純な作業に飽きてきたので、潮溜

まりを覗いて回った。潮溜りでは波が押し寄せ海水が入り込む度に海草が揺

れ、その側では小さな魚の群れが海草の揺れに合わせてるように泳いでた。潮

溜りから半分身を乗り出して泡を吹いている小さな蟹もいる。修一はその蟹

を捕まえようとして甲羅に右手を伸ばした瞬間、人差し指の先を爪で挟まれ

てしまった。小さな蟹でも凄まじい爪の力であった。

「痛い！」

修一は余りの痛さに悲鳴を上げた。必死で蟹を振り払おうとして手を振ると

蟹の爪は修一の指を挟んだまま蟹の体から離れ、蟹は潮溜まりの中に逃げて

行ってしまった。爪は蟹の体から離れてもまだ修一の指先をきつく挟んだま

まで修一の力では取る事が出来なかった。

「痛い、痛い、痛い……。おんちゃん、博のおんちゃん」

「おまん、どうした」

「蟹に指を挟まれた」

「どら、見せてみいや」

「いよいよなあ。これは硬とつて取れんにゃ」

「おんちゃん、はよう取つて」

蟹の爪は硬く締め付けた状態でなかなか取れず、博は側に有った石で蟹の爪

を叩き割る事にし、蟹の爪の根元を岩場に載せてその上から石で叩き割った。

割った後も爪の先が指先に食い込んでいたが、今度は簡単に外れた。

「あーあ、やっと外れた。痛かった」

「指は大丈夫かよ？」

「うん。もう大丈夫や」

「気を付けないかんぜよ。まっと大きな蟹やったら指をちぎられる事も有るがやきに」

「はい」

修一の指先にはまだ爪の跡と痛みが残っていた。

「修ちゃん、どうぞね。血は出ちゃあせんかね」

房子が心配して修一の指先を見た。

「何ちゃあ大丈夫よ」

博がそう言つと、

「そやかて修ちゃんが怪我でもしたら、大変やきに。大阪のお兄さんに顔向

けが出来んなるきに」

「これ位たいした事や無いわや。子供の頃にはよく有る事よ。何ちやあ心配

いらん、いらん」

「おばちゃん、大丈夫や」

と言つたものの、まだ少し痛かつた。

「そうかね。そんならええけんど」

「修ちゃん、痛かつつろ」

文江も心配したように修一に言つたが、

「でも、修ちゃんはどじやね」

と付け加えた。修一は何とも言いようがなかつた。

「そろそろ、お弁当にするかね。修ちゃんもお腹が空いたろ」

房子がそう言つてお弁当を広げ、皆で輪になって食べ始めた。磯の

上で潮の

香りを嗅ぎながら食べるお弁当は格別な味がした。海苔の巻いたおにぎり、

厚く焼いた玉子焼き、ゆで卵、炒めた魚肉ソーセージ、野菜の煮つけなど房

子が朝早くから起きて心を込めて作ってくれたお弁当であった。

「美味いろっ」

博が修一に訊いた。

「うん。おいしい」

「でも修ちゃんは大阪でもっと美味しいもんを毎日食べゆっろっきにね。お

ばさんが作ったもん口に合っろっかね」

「おばちゃん。おいしい」

「そんなら、ええけんど」

「そらそっよ。土佐の食べ物は何なんやち、美味いわや」

博が自慢した。

「うん！」

修一がそう言うと、房子は安心した表情を浮かべた。正直、修一は本当に美

味と思った。陽の光が海面から照り返し海が眩しく見えた。

「ただいま」

「大山はどうやったぞね」

祖母が修一に訊いた。

「楽しかった」

「それは良かったね。ほいで、収獲は有ったがかね」

「うん。これ」

修一は貝の入った筥はこを祖母に見せた。

「どっさり取って来ちゅうね。あとで塩茹でしちよききに食べたらええわや。」

博のおんちゃんらあには、ちゃんとお礼を言ったがかね」

「うん。また来年も行くからって言った」

「それは、また楽しみなことよ」

「それと帰る前には、もう一度おんちゃんくに来るようにて」

「そうよね。帰る前には挨拶にいちよかないかね」

「うん。そうする」

でも、修一はかしはだけは食べたくないと思っていた。

「武ちゃん、来んかった？」

「今日は来ざったよ」

「それと、そろそろお盆に入るきに川には行かれんぞね」

「うん。分かてる」

でも修一は釣に行きたくてしかたがなくて、夕食前に武の家を覗きに行った。

「武ちゃん」

「修ちゃんかよ」

「今日は釣りは行かんかったんか？」

「今日は朝から勉強しよったがよ。夏休みの宿題がだいぶ溜ちよったきに。」

お祖母おばあが勉強せえてぎっちり言つて煩いながやきに。修ちゃんは夏休みの宿

題はしゅつががよ

「うん……。でも、残りは大阪に帰ってからにするつもりや」

「ほいたら、また明日は釣り行くかにゃ」

「でも、お盆は川に行くなって言われてる」

「家うちんくのお祖母おばあも『お盆おぼんやきに川には行かれんきに。行たら仏さんに連れ
て行かれるきに』て言いよったけんど、明日はまだ十三日じゅうさんやきに、
まだ構かまう
かよ。それでよ、明日釣つりに行た時に江湖川こわうがわの上の方うへの土手どてで鰻うなぎを獲
りゆう人りゆうじん
が居るゐきに見みに行いこちや」

「うん。そしらた明日あしたは何時なんじにする?」

「一時いちじになったら、お祖母おばあに分わからんように抜ぬけ出すだすきに。ほいで
和食屋わしきや分わか
店の前みせまへで待まちちよらよ」

「武たけちゃん、分わかった」

二十一、鰻獲りとお盆の迎え火

翌日の午後、修一は祖母に見つからないように釣竿を持って勝手口からそつと家を抜け出した。武はまだ来ていなかったが、直ぐに慌てたように駆けてきた。

「おおの、めったぜよ」

「武ちゃん、どうした」

「家うちんくのお祖母おばがぎつちり側で裁縫しゆうがよ。ほいで、なかなか分からんように抜け出せざった。待たせて御免よ」

「僕も今来たばかりや」

「ほな、行くかにや。この前取った蜂の巣は修ちゃんが預かつちよつたろう。」

「どうした？」

「鶏小屋の横に置いたままで、今日の朝見たら巣の中が空っぽになつた。」

「鶏が突付いたみたいや」

「ほいたら、先に蜂の巣を取りに行くかにや」

武と修一はまた何時もの様に蜂の巣探しから始めた。三十分程で二

つ見付け
る事が出来、急いで江湖川に下りて行った。今日は鰻獲りを見る目的も有り、川上の黒鳥付近まで行く事にした。川の北側は田んぼが一面に広がり川上に行くに従い川は北に向かって蛇行し、岸の両側の景色は全て田んぼに変わった。最初の稲の刈り取りが終わり、新たに苗を植え付けたばかりで、どの田んぼも青々としていた。田んぼの上を赤とんぼの群れが飛び交い秋を感じさせていた。

「修ちゃん、あそこでおんちゃんが鰻を獲りゆう。行てみよ」

「うん」

側まで行くと土手の側面の小さな穴に針の付いた細い竿を差し込んで何やらしていた。

「おんちゃん、獲れゆうかね」

武が訊くと、

「ぼちぼちにかあらん」

暫く見てみると、その小父さんは針に鰻が掛かったのか竿を穴からゆっくり

と引き抜いた。竿の先が穴の入口まで来ると太い鰻が針にかかり竿

の先に巻

き付いていた。鰻は直ぐに針を外されて魚籠に入れられた。

「おんちゃん、太いのが獲れゆうやいか」

武が魚籠の中を覗き込むと、

「今日はまあまあよね」

武と修一は暫くそのおんちゃんの側で鰻獲りを見ていて、別の穴に移動する

と武と修一も一緒に付いて移動した。修一は試しに数ヶ所の穴を覗いてみた

が穴の中は真暗で何も見えなかった。

「おまんら、見るがは構わんけど、釣はせんがかよ。釣竿を持つちゆうが。」

早よう釣りを始にゃ日が暮れるぜよ」

武と修一は鰻獲りを見るのに夢中になり釣の事はすっかり忘れていた。

「そやったよ。修ちゃん、そろそろ釣り始めるかにゃ」

「うん。そやな」

武と修一は釣りながら川下に向け釣り場を順番に移動して行った。しかし、

今日はどう言う訳か全然魚が食い付かなかった。

「いよいよ、今日はいかにゃ」

「武ちゃん、場所が悪いがやない」

「そんなこたないろつ。さつきから順番に場所を変えて釣りゆうがやに」

結局、釣り始めて二時間以上経って武がやっと八ヤを一匹釣っただけだった。

「いよいよにゃ。こんな筈はないけんど」

武は不満たらたらでいた。

妙山寺の裏手辺りに来ると、陽は既に西に傾き周りは薄暗くなってきた。

「修ちゃん、帰るかにゃ。また明日にすらあよ」

「明日、大丈夫かな」

「大丈夫やちや。またうまく抜け出すきに」

「明日、昼前に一度修ちゃんくに行くきに。それから時間を決めたらええわ

や

「そしたら、明日武ちゃんが来るのを待ってるから」

武と修一は薄暗くなった道をとぼとぼと帰って行った。道の両側の

家々の前

では既に松の木で迎え火が焚かれていた。その揺ら揺らとした炎が二本の線

のように連なり浜の方まで続いていた。薄暗さと相俟って夕暮れの静けさの中

に幻想的な雰囲気醸し出し、修一にとって忘れられない盂蘭盆会の風景となった。

二十二、友恵との再会

修一は祖母が土間で食事の仕度をしているのではと思い、門のイチジクの

木の側に釣竿を立て掛けてから、そつと家上がるつと考えた。しかし、修

一がイチジクの木の側まで来た時、運悪く祖母が玄関先に出て来て見付かっ
てしまった。

「あればあ、お盆には川に行かれない言つに。行ったち何ちゃあ釣れざつ
たろつ」

「うん。あかんかった」

「ほら、言わんこつちやないろつ。仏さんが殺生をせられんて言つ
がよね」

修一は何も言つ事が出来なかつた。

「ほいでよ、修ちゃんにお客さんが来ちゆうきに」

「お客さん？誰やろ」

さつきから奥でホオズキを鳴らす音が聞こえていた。もしかして順子ねえち

やんかと修一は思った。

「順子ねえちゃんが高知から帰ってきたんか」

「違うぞね。順子は今日からお盆のお休みで黒瀬に戻ちゅう」

「お客さんが奥で待ちゆづきに早ように行てみいや」

「うん。誰やるなあ？」

修一は奥の八畳間に行った。

「修ちゃん。帰るがが遅いね。待ちくたびれたぞね」

「友ちゃん」

修一は驚いた。まさか友恵にまた会えるとは思ってもいなかった。

「修ちゃん。お盆に釣りに行ちよって、お祖母さんに叱られたろう」

「まあな。でも、びっくりした」

「驚いたかね」

「うん。友ちゃんは脅かすがが好きやな」

「そんな事ないちや。お父さんとお母さんが、穴内あなないのお母さんの実家にお盆

で行くきにて。そやきに頼んで一緒に連れてきてもろたがよね」

「そやったんか」

「お父さんとお母さんはお盆が済むまで穴内の実家に居るがやと」

「そしたら、友ちゃんはお盆が済んだら黒瀬に帰るんか」

「修ちゃんは、何時大阪にいぬるが？」

「僕は二十二日に帰る」

「ほいたら、友恵も二十二日まで安芸に居る事にするきに」

修一は友恵の言った事に戸惑った。

「ねえ、小母さん構わんろう」

「友ちゃんの事やき何時まで居ったち、何ちゃあ、小母さんらあは構わんよ」

「有難う、小母さん。修ちゃん。また暫く一緒に遊べるね」

「うん」

修一は複雑な気持ちになった。

「修ちゃん。二十一日は七夕やきに一緒に七夕飾り作るね」

「うん・・・」

修一は少し顔を赤らめた。

「修ちゃん。良かったやいか。また遊び友達が出来て。ほいたら、

食事にて

もするかね。普段はお祖父さんと二人だけやけど、家族が多いと賑やかで
食事も楽しいわや」

祖母はそう言ってニコニコしながら土間に戻って行った。

修一は照れ臭さくなり、暫くは友恵に何を話して良いか分からなかったが思
い切って話し掛けた。

「友ちゃん、この前の絵有難う」

「あまり上手やないけど。気に入ってくれたがかね？」

「うん。友ちゃんは絵を描くのが上手や。僕の絵は全然あかん。学校でも貼

り出された事が一度もないし」

「今度はもっと上手に描いた絵を栗と一緒に送るきに楽しみにしよう
つてよ」

「うん。楽しみにしてる」

「今度は吊橋を描くきに」

「黒瀬の吊橋か。ええなあ」

「食事の仕度が出来たぞね」

間もなく祖母が二人を呼びに来た。

曾祖母、祖父母、友恵、修一の五人でお膳を囲んでの賑やかな食事になった。

「今日は鯖の姿ずしをこさえちゃうきに」

祖母が楽しそうに言った。家族、親戚が集まったの大勢での食事は矢張り楽しいと修一も思った。

「修ちゃんは二十二日に大阪に帰るがやったな」

祖父が修一に訊いた。

「うん」

「ほいたら大きな荷物は二十一日にチツキで送っちゃよか。お土産も入れちよ

くきに。大阪の家で食べたらええように、鰯と鯖の干物とおじゃこを入れち

よく。ほんで、修ちゃんの好きな芋ケンピもどっさり入れちよくき。

野根鰻

頭は日持ちがせんきに帰る時に手で持っていんだらええは」

そう言いながら祖父は少し寂しそうな表情をした。

「修ちゃんはお土産がどっさり有ってええことよね」

友恵が羨ましそうに言った。

「曾祖母おばあちゃんは何時からお遍路さんに行くんや」

修一が曾祖母に訊くと、

「あても、二十二日から行く事にした」

「二十二日から？」

修一が曾祖母に訊き返した。

「そうよね。二十二日から行く事にしたがよね。二十二日におまんと一緒に

高松迄行くがよ」

修一は曾祖母と一緒に高松まで行くとは思ってもしなかった。

「曾祖母おばあが、おまんを高松まで送って行っちゃうきに。何ちゃあ道中の心配は
いらんぜよ」

「修ちゃん、曾祖母おばあさんに送って行って貰えるきに良かったやいか。
あても

一緒に修ちゃんを高松まで送って行っちゃおかね」

友恵が楽しそうに冗談を言うと、

「修ちゃん。そうしてもらっつかね」

祖母が友恵の冗談に合わせて言ったので、修一は自分の顔が赤くな

るのを覚
えた。

「でも、修ちゃんが大阪にいぬるとまた寂しゅうなるぞね」

祖父がポツリと言った。

「お祖父ちゃん。また、来年の春休みか夏休みに帰ってくる」

修一はこのままこの田舎で過ごしたいと思っていた。山の連なり、水の澄んだ川、雄大な海の有る自然に囲まれたこの町、自分が生まれたこの家が好きでたまらなかった。

「でも、まだ帰るまで日が有るきに」

と友恵が祖父の気持ちを察するかの様に言った。

「修ちゃん、それまで盛大遊んで行きよ」

祖父が修一にそう言つと、

「けんど、前から言う様に、お盆の間は釣りや泳ぎに行たらいかんぞね」

祖母が付け加えた。

「まっこと、お盆には行かれん。仏さんに連れて行かれるきに」

と曾祖母も一緒になって修一に言った。

修一は、明日の午後も武と一緒に釣りに行く予定になっていたので困ってしまっただ。

「ところで、今回のお遍路は何日位の予定かね」

祖母が曾祖母に訊いた。

「今回は讃岐の八十八番の大窪寺おおくぼから反対に回るきに。ほいで、三十六番の青龍寺しょうりゅうさんで二、三日厄介やくわいになってから安芸に戻って来る積りであるがよ。

そこで、清滝寺さんからは日を改めて回る事にすらあ

「一月ひつき以上は掛かるろうかね」

祖母が心配な顔をした。

「それ位掛かるろうと思う」

「歳やきに気を付けとせよ」

「お大師さんと一緒やきに大丈夫よね。ちゃんと守ってくれらあよ」

お大師さんと一緒は曾祖母の口癖であった。

「修ちゃんも大きゅうなったら、この曾祖母おばあとお遍路に行くかのし」

「うん。行く」

修一にはお遍路の意味が分かっていなかったが、何故か一緒に回ってみたい
と思った。

「修ちゃんが行くがやったら、友恵も一緒に回るきに」

「修ちゃんと友ちゃんが一緒にこの曾祖母おばあとお四国を回ってくれる
がやった
ら、まっことこれほど心強いものはないぞね。そつよ！修ちゃんが
大阪にい
ぬるまでまだ日が有るき、ええ機会やきに青龍寺さんに行ってみるか
ね」

曾祖母が突然言い出した。

「曾祖母さん、あそこは険しいぞね。まだ小学生には無理やちや」
祖母が心配して言うと、

「何ちやあ、こればあの歳からやち、かまあなや。大人になったら
まっ和人
生は厳しいぞね。険しい程ええわや」

「青龍寺さんの奥の院へ行く道はまっこと大変ぞね」

「わしやち、何度も行きゆうが。これからの修ちゃんの人生を考え
たら、あ
れ位大した事ないぞね。あればあの事でへこたれるようやったら世

の中付い
ていけんぞね」

「そやけんど・・・」

祖母はまだ心配していた。

「今から少しでも苦勞しちよいた方が先々為にならあよ。えい経験よね」

「ほいたら、ええろかねえ」

祖母は渋々了解した。

「ええ機会やきに、修ちゃんも一度は行てきたらええわや。曾祖母つはばあさんに連れていてもらい」

祖父は修一には良い経験になると思った。

修一は観光気分で単なるお寺参りとしか考えていなかったが、友恵はさすが

に土佐の育ちでお遍路の大変さについては良く知っていた。特に土佐は四国八十八箇所の中でも修行の場とされ、県内の各札所やその道程は殆どが厳し

いものばかりであった。

「修ちゃん、よう行くろうか」

友恵が心配そうに言うと、何だか自分が頼りなく思われているような気がした。

「友ちゃん、お寺参りは任しとき」

「修ちゃん、そんなもんやないちや。大変ぞね」

「そしたら友ちゃんは行かへんのか」

「友恵は大丈夫やきに行くえ」

「そんなに大変な事でもないきに。何ちゃあ心配いらんいらん」

曾祖母が横から二人に言った。

「修ちゃんが途中でへたつたら友恵が助けちゃうきに心配いらんえ」

修一は少し腹が立って来た。

「ほいたら、明後日あしたに行くかのし」

曾祖母は早々と日取りを決めてしまった。

「明後日は宇佐まで行って、一晚泊まってから次の日にお参りすればええきに」

「曾祖母ちゃんおばこ、お参りした日に安芸あきに帰ってくるんか」

修一が訊くと、

「次の日に帰る事にすらあ」

「そしたら二泊三日やな」

「その方が、忙^{せわ}しのうてええろ。ほいで帰りに高知のデパートの食堂で仏さ

んの何たら言うケーキを修ちゃんらあにご馳走^{ごちそう}しちゃうきに。曾祖^{ひば}母もあれを食べとうなったきに」

曾祖母はまた曾孫とお参りに行けるので嬉しそうな顔をしていた。

「仏さんの何たらケーキって何？」

友恵が訊くと、

「蜂蜜が上にかかちよって甘もつて、まっこと美味いお菓子ぞね」

曾祖母が皺くちな顔を更に皺くちやにして友恵に言った。

「何んやろつね？」

友恵は不思議そうにした。

「友ちゃん、ホットケーキや」

修一が友恵に言うと、

「なんや、ホットケーキかね」

友恵が納得した。

「仏さんの何たらケーキやないちや。ホットケーキよね」

友恵が曾祖母に言った。

「そうよ。その何たらケーキよ」

曾祖母がそう言うと可笑しくて皆が一斉に笑いだした。

二十三、貝殻拾い

翌日、修一は武と釣りに行くか迷っていた。午前中に夏休みの宿題を済ま

せ、薪割りをしながら武が来るのを待っていると、

「修ちゃん、居るかよ?」

武がしょげた顔で勝手口から入ってきた。

「修ちゃんよ。おおの、昨日は家んくのお祖母からしこたま怒られたぜよ。」

釣りに行たががばれちよった。誰かに釣りをしゆうがを見られたにかあらん。

ほいで帰ってから大事ぜよ。『おまん、何処に行ちよった?』て聞かれたがよ。

ほいでよ、『友達んくに行ちよった』て言つたけんどよ。ほいたら『嘘は言わ

れん。ある人がおまんくの孫さんが江湖川で釣りをしゆうがを見たてわざわ

ざ言いに来てくれたがやよ。まっことたまるかよ。あればあ、お盆は川には

行かれない言つちゃうに。仏さんに連れて行かれたらどうするぞね。たまる

か』て。ほいで、まだ十三日ぜよ。仏さんが帰るがやないきにかまんろつて

言つたわや。ほいたら、家んくのお祖母がよ『仏さんにも色々有るがやきに。

お盆の初めでも我が戻るくが分からいで迷つちゆう仏さんも沢山居

るがやき

に。そんなら丁度ええきにて仏さんに付いて来られたらどうするぞね』って、

けんまくよね。本当、めったちや」

「武ちゃん、大変やったな」

「修ちゃんは怒られざったかよ」

「うん。帰って来た時に見つかつて、少し・・・」

「そやきに、お盆が済むまでは釣りにはいけなあや。やめちよ」

「うん。分かった」

「送り火が済むまでは、夏休みの宿題をする事にするらあ」

修一は内心ほつとして気持ちが楽になった。

「明日から、曾祖母おばあちゃんと宇佐の青龍寺にお参りに行く事になった。十七

日には戻ってくる」

「ほいたら、帰ってきてからまた釣りに行けらあや」

「うん。そうする」

そう言って、武は家に戻っていった。

友恵は祖母の横で家事の手伝いをしていた。

「修ちゃん、昼から何処かへ行くがかえ」

友恵が修一に訊いた。

「別に決めてないけど」

「釣りには行かれんよ」

「釣りには行かん！」

友恵にまで何度も言われると腹が立ってきた。

「そうよね、釣りには行かれんきにね」

更に、横から祖母が念を押すように言った。修一は退屈で堪らなかった。

「修ちゃん、後で浜に行ってみなかね」

友恵が、退屈そうな修一を見て言うと、

「海もお盆やから行ったらあかんで言われてる」

修一はぶっきらぼうに言った。

「泳ぐがやないきに構わんよ。小母さん、浜へ行って見るだけやっから何ちゃ

あ構わんろっ?」

「見るだけやったら構わんよ。けんど、波の近くには寄られんぞね。突然、大きな波が来る事が有るきに」

「おばさんもえいて言つきに。昼から一緒に行こちや。友恵、海が見たいな
がやきに」

「そうやね、友ちゃんは何時も山の中で暮しゆつきに。あとで修ちゃんも見
に行てきたらええわや。修ちゃん。友ちゃんも行てきいや。明日の支度は
曾祖母おばあさんとしちよくきに」

「うん。そしたら昼から浜に行く事にするは」

修一は渋々行くことにした。

「ほいたら、そろそろ昼御飯にするかね」

「友恵がお膳を出すきに」

友恵は修一と浜に行ける事になり嬉しそうな顔をしていた。

「ありがとう。友ちゃんは優しいね」

友恵は楽しそうに祖母の手伝いを始めた。

食事の後、友恵と修一は浜に出かけた。家を出て浜の方に向かって二人で歩

いて行くと鍛冶屋からはトツテンカン、トツテンカンと何かを打つ音が聞こえてきた。鞆ふいしの前で小父さんが汗を拭きながら力を込めて何かを打っていた。

中学校の手前の四ツ辻では近所の小母さん達数人が集まって何やら立ち話をし、友恵と修一が側を通り過ぎても何ら気に留める様子もなかった。中学校

の塀の向こうには土俵が有り、中学生と小学生数人がふんどし姿で相撲の練習をしていた。顔、肩、背中、足など体中が泥まみれになり、押し出されても、投げられても何度も何度も土俵に上がって行った。立ち止まり相撲の稽古を見ていると、

「皆、この暑いに頑張りゆうね」

友恵が修一に言った。

「うん」

「でも、恥ずかしいきに、早はよ行こちや」

修一には友恵の言った「恥ずかしい」の意味がまだよく分からなかった。

中学校の塀に添って中程まで来ると浜に打ち寄せる波の音が大きくなり潮の香りも強く感じた。ふと友恵の手を見ると小さな布袋を提げていた。

「友ちゃん、その袋何？」

「これかね。これは浜で貝殻を拾って入れるが。それで持ってきたがよね」

「貝殻？」

「そうよね」

「貝殻を集めてるんか？」

「集めてはおりやせんけど、浜で綺麗な貝殻を沢山拾って持って帰るが。」

ほいで新学期が始まったら学校の友達に分けちゃうがよね」

「そうなんや」

「そしたら、皆喜ぶろっ」

修一も子供心に友恵は思いやりの有る優しい女の子だと思った。

浜に下りて行くと中程には引き上げられた櫓漕ぎの舟が数隻並べられていて、

砂利や砂を採取する荷馬車も頻繁に行きかい、沖合には漁船が二隻ずつ平行

に航行し網を引いていた。その向こうには水平線の膨らみと空との交わりが

見え、時たまその水平線上を航行する大きな船も見えた。二人は波打ち際に

早く行き着こうとしたが歩きたびに足が砂に食い込んでなかなか前

に進む事

が出来なかった。それでもさすがに友恵は修一よりは早く波打ち際まで辿り着いた。

「修ちゃん、遅いちゃ。早よう来いきや」

「うん。すぐ行くから」

修一は友恵より大分と遅れて波打ち際に着いた。

「修ちゃんは遅い」

「砂でなかなか前に進めんかった」

「やっぱり海は広いし気持ちがあええね」

友恵は水平線の彼方を見詰めていた。

「うん。気持ちええ」

修一は波の音を聞き、潮の香りを嗅いでいると、このままこの町で暮す事が出来ればと思った。

「黒瀬の山もええけんど、海もええわ。潮の香りが何ともいえんねえ」

友恵が嬉しそうな表情で海に向い両手を大きく広げ深呼吸をした。

「ねえ。東に堤防が見えるけど、あれは安芸川の川口やね」

「うん。そして、伊尾木川の川口はあの向こうに有る」

「ほいたら、黒瀬からあそこまで水が流れて来ゆうがやね。黒瀬の川と海が繋がちゆうがやね」

友恵は黒瀬で何時も見ている川がこの目の前の海に注ぎ込んでいる事に感動していた。

「あの向こうはなんやろ」

「あれは、大山岬や」

「大山岬・・・？」

「うん。この前、親戚のおんちゃんとう貝獲りに行ってきた」

「貝獲りに行たが？友恵も行きたかった」

「でも、友ちゃんは黒瀬に居たから無理や」

「ほいたら、今度は一緒に行こね。友恵のお父さんに頼んじよくきに」

「うん」

「西に見えるがは何んやろ」

「あつちはよく知らん。高知とちやうやるか？」

そのうち友恵は波打ち際で下を見ながら貝殻を探し始めた。

「小さいけど色々な貝殻が落ちちゆう。でも貝の名前が分からんね」

「図鑑で調べたら分かると思うけど」

「うん。そうするき。いやあぁ・・・、修ちゃん、この貝殻綺麗やいか！」

友恵が小さな貝殻を拾い上げて修一に見せた。

「それ、タカラガイとちやうか？」

「タカラガイ？」

「うん。そうやと思っ」

「修ちゃん、よう知っちゆうね」

「それぐらいしか分からん」

「ほいたら、これは何？」

「・・・・・・・・分かんへん」

「ほいたら友恵、学校が始まったら図鑑で調べてみるきに。タカラ

ガイをど
っさり集めて首飾り作ったら綺麗ろっね。皆、喜ぶに。修ちゃんも
一緒に集
めて」

「うん、分かった」

一時間程波打ち際を行ったり来たりして袋に半分程集める事が出来
た。

「大分集まったちや」

「友ちゃん。良かったな」

「修ちゃん。有難う」

「これで首飾り何本作れるろう？」

友恵は袋の中の貝殻を数えていた。

「いや。まだ足らんちや。修ちゃん。お願いやきにまっと拾って」

「もつと？」

「うん。まだ足らんがよ」

「分かった。僕は西の方を探すから、友ちゃんは、東の方を探して
みて」

「うん。そうするぞ」

修一は面倒臭いと思いながらも、再び貝殻を拾い集める為に港の方に向けて歩いて行き、友恵は修一の言ったように、川口の方に向かって歩いて行った。暫くして、修一が貝殻を拾い集めて戻って来ると波打ち際の近くの窪んだ処で友恵がしゃがみ込んでいる後ろ姿が見えたので、どうしたのかと思いを掛けた。

「友ちゃん。どうしたん？」

「いやちや。こっちに来られん。へち向いちよって」

修一には意味が分からなかった。友恵は慌てたようにして立ち上りスカート
の裾を直して顔を赤らめながら修一の居る所まで来た。

「なんや。オシッコか」

「そんなん言うたらいかん。恥ずかしいちや。誰っちゃんあに言われんきに」

「誰にも言わんて」

修一は友恵の話し方が可笑しくて笑い出しそうになった。

「修ちゃん。何が可笑しいが？」

友恵は怒ったような顔をした。

「別に何にも可笑しくないって」

「修ちゃん。心の中で笑いゆうろう」

「そんな事ないで。僕も立ちションベンは時々するから」

「いや、修ちゃん大嫌いや」

修一はどの様に言っているのかわからなくなり、拾い集めてきた貝殻を友恵に渡し帰ろうとした。

「これ、貝殻やから。もう帰る」

「修ちゃん、怒ったなが？」

修一は何にも言わなかった。

「恥ずかしいながやきに」

修一は防波堤に向って歩き始めた。

「修ちゃん。さっき大嫌いや言ったがは嘘やきに。何ちゃあ気にせ
ららんよ。」

「恥ずかしかったながやき。御免よ」

修一は黙って首を立てに振った。

「修ちゃん。友恵の為に沢山の貝殻集めてくれたがやね。有難う」

友恵は恥ずかしくてまだ顔を赤くしていた。

修一と友恵はそれから暫く波打ち際に座り海を眺めた。陽を受けて海面がキ

ラキラと光り、沖の盛り上がった水平線の上には黒く大きな船が東から西に
行くのが見え、その内にその船も水平線の向こうに隠れて見えなくなつた。

「修ちゃん。あの船、何処に行くがやろうね？」

「船長さんと違つからわからん」

友恵は修一の返事にガツカリした。「何処か遠くの外国に行くのと
ちやうやろ

うか」と言ってくれるのではと期待していた。

土用を過ぎた波はいつもよりは大きく浜に打ち寄せていた。

家に戻ると友恵は居間で裁縫をしている祖母に貝殻を見せた。

「小母さん、どっさり拾ってきた」

「どれ。ぎょうさん有るやいか」

祖母が袋の中を覗き込んだ。

「修ちゃんが集めるがを手伝ってくれたがやきに」

「そうかね。でもそんなにどうするがぞね」

「首飾りを作って友達に分けちゃうが」

「そら、ええわ。友達も喜ぶね」

「うん。首飾りを作るがも楽しいき」

「友ちゃんは女の子やね。修ちゃんも貝殻拾いを手伝っちゃって偉かったね」

「そんなん、大した事ことない」

修一は照れ臭かった。

「その菓子箱に芋ケンピが入っちゅうきに二人で食べや」

「うん」

「おばさん、有難う」

友恵と修一は菓子箱を持って縁側に行き、芋ケンピを仲良く食べ始めた。二

人とも浜で長らく潮風に吹かれたせいで顔中が塩でべたべたになっていた。

二十四、青龍寺へのお参り

翌朝早くに曾祖母、修一、友恵の三人は宇佐の青龍寺しょうりゅうじに向った。汽車待ち

バス待ちの時間などで三人が宇佐に着いたのは午後の二時を過ぎていた。

宇佐は鰹の一本釣り漁の本場で港には鰹釣り漁船が数隻停泊していた。港か

らは青龍寺の有る対岸の竜岬りゅうさきやその上の宇都賀山うつがやまがよく見渡せた。

対岸は横

波三里と云われる半島で陸続きであるが浦の内湾で隔てられている。東から

回れば歩いて行くけるが何十キロも遠回りしなければならず、それ故、地元

の人達やお遍路さんは昔から龍の渡しと呼ばれている渡し船を使っている。

「皆、疲れちゃあせんかね」

曾祖母が二人に訊いた。

「友恵は大丈夫やきに。修ちゃんが疲れたがやないろうか」

「僕は大丈夫や」

「ほうかね。ほいたらええけんど。これから宿に行くきに」

宇佐では曾祖母の馴染みの遍路宿で泊まることにしていた。

「あれまあ、岩崎さんやないです。お久しぶりです」

宿に入ると女将が曾祖母に挨拶をした。

「女将さん。今日と明日三人でご厄介になりますきに」

「ほな、すぐに部屋を支度しますき少し待ってつかあさい。このお子達は」

「わしの曾孫と弟の孫ですらあ」

「それはそれは。お子達は疲れやせぎったかね」

「若いきに大丈夫ですらあ」

「そうですね。ところで、岩崎さんはまたお遍路ですか」

「今日は青龍寺さんにこの子らあを連れてお参りに来たがです。お遍路はま

た改めて回る予定で居るがです」

「そうですね。今回、奥の院にもおいでのご予定で？」

「はい。奥の院もいきます」

「奥の院はお子達も一緒に？」

「はい。そうですね」

「あそこは特に道が険しいきに、お子達にはなかなか大変やなかる

うかね」

「何ちゃあ、もう小学校の五年やきに、これ位の険しさを経験させてもええ

やないろつかと思うて連れて来たがです」

「そうでしたか。ほいたら皆さん頑張つてつかあさいね」

修一は皆が言う程そんなに大変な処なのかと思ひ少し不安になってきた。

曾祖母が宿で寛いでいる間、修一と友恵は港を見に出掛けた。港の岸壁から

海を覗き込むと水は透き通り底まで見る事が出来た。

「修ちゃん、水が綺麗やね」

岸壁の近くでは小魚の群れが泳ぎまわっているのが見えた。

「うん。魚が泳いでるのが見える。釣竿持って来たら良かった」

「修ちゃん。あほう言われんちゃ。あてらお参りに来ちゅうがで、それに今

はお盆で」

修一は友恵の言った事にまたもムツとしたが、それもそうかと思つた。

「友恵は高知から西に行たことが無かつたきに、こんなところまで来たが初めてよね」

「僕も、初めてや」

「船も白うて綺麗やね」

真新しい白のペンキで塗られた鰹釣り漁船を見て友恵が言った。西には浦ノ

内の穏やかな入り江と岸壁の向こうには対岸の竜岬が見え、さらに向こうに

は土佐湾が広がっていた。渡し舟で地元の人達やお遍路さんが渡って行く光景も見えた。

「修ちゃん、あてら明日あれに乗るがで」

友恵が渡し舟を指差した。

「うん」

「修ちゃん。船に酔いなよ」

「酔わんよ」

と言ったものの、もっと幼い頃に宇高連絡線で船酔いをしたことを思い出し

た。修一はあまり乗り物には強くなく、自動車、バスなどは苦手で、遠足の

時などは出来るだけ前の席で窓際に座らせてもらっていた。

翌朝、三人は宿で朝食を済ませ青龍寺に向かった。海は穏やかで渡し舟も揺れることなく、時間も短い為、船酔いはしなかった。船着場から左に穏やかな入り江を眺めながら歩き、更に右に曲がり細い平坦な道を山に向かって歩いて行き、突き当たりを左に曲がった辺りからは右側が山の斜面、左側には田んぼが広がった。地道で細く曲りくねっているが、そんなに急勾配でもなく険しさは感じなかった。右側の山裾には道に沿って色々な石仏が点在し、周りの木々からは蝉の鳴声が聞こえていた。青龍寺の山門に到着すると、

「ここが青龍寺さんよね」

曾祖母が言い、山門の手前にある納経所に行き挨拶をして戻ってきた。

「ほいたら、これから上がるきに。そこで手を洗って、口を濯すすぎよ」

友恵と修一は曾祖母に言われたように山門の右に有る手洗い場で手を洗い、口を濯いだ。寺の造りは黒瀬の八坂神社と同じようであったが石段の幅は二倍以上で、数は一七〇段も有り、山門から本堂を見上げると凄く高い所に有るように感じたが、これ位大した事は無いと修一は思った。友恵と修一は曾

祖母の後を付いてゆっくり石段を上がって行った。少し石段を上がった左側

に湧き水を高い所から石の樋で流している滝のような場所があった。

「ここで行者さんらあが水行をするがやき。おまんら、よう見ちよきよ」

曾祖母からそう言われても、修一には水行の意味が理解出来なかった。

「あて先に行くき」

さすが山育ちの友恵は曾祖母を追い越して先に上まで上って行った。

修一も

負けてはいられないと思い曾祖母を追い越し駆け上がっていったが息が切れ

てしまい途中で休んでいると、

「修ちゃん、早よ上がってきいや」

友恵が上から修一を呼んだ。その内に曾祖母も追い付いてきたので、

修一は

再び石段を駆け上がった。

「修ちゃん遅いちゃ」

修一は息を切らせ汗だくになった。

曾祖母はマイペースでゆっくり石段を上がって来たが、それでも修一が石段

を上がり終わってから間もなくだった。

「走って来たので息が切れた」

「こればあで息が切れてどうする。奥の院はまっ和大変え」

友恵が修一を励ますように言った。修一はこれから先の厳しさが少しずつ分かってきた。

三人は少し休み、右のお社、薬師堂、本堂、そして一番左の大師堂を順番に

お参りした。曾祖母は御真言やお経を唱えていたが、二人にはさっぱり分

らず、曾祖母の後ろで手を合わせて俯いてるだけであった。ただ、先日薫的

さんにお参りに行った時のように痺れが切れないだけ良かったと修一は思っ

た。お参りを終えると三人は今上ってきた石段を下り山門まで戻った。

「つまずいてこけたら大事おおじやきに、気を付けて下りないかんぜよ。走られんよ」

曾祖母が二人に注意した。

戻りは下りの為、修一は息も切らさず降りる事が出来た。奥の院へは山門を

出た処で暫く休憩してから行く事にした。

「その奥に廁かわやが有るきに行てきいや。曾祖母おばあも小便せうべんばつてくるきに」

そう言つて曾祖母は便所に行った。

「いやちや。曾祖母おばあさんは」

友恵が呆れたように言つた。

「僕も行つてくる」

そう言つて修一も便所に行った。曾祖母と修一が便所から戻つてきて曾祖母が友恵にもう一度訊いた。

「友ちゃんは、廁かわやはええがか？」

「あてはまだ構わんよ」

「奥の院には廁かわやがないきに、ここでしちよきよ」

友恵は少し考えて、

「ほいたら、行てくるきにちつと待ちよつてよ」

と言つて友恵は便所に走つて行つた。修一は友恵の後姿を見て先日
の安芸の
浜での事を思い出していた。

奥の院は山門の左手前の細い山道を上って行き、最初は平坦であったがすぐに細い急な上り坂となり、木の枝などに掴まらないと上れない処も多く有り、大変険しい道であった。曾祖母は石段の時と同じく、ゆっくりと、しかし力強く一歩ずつ一歩ずつ、口では「南無大師遍照金剛」を唱えながら歩いていった。友恵は曾祖母より遙か先を行き、修一は曾祖母の少し後ろを歩いていた。

修一は曾祖母の後を付いて行くのがやっとで、汗だくで息が切れ、休み休み上がって行った。先を行っていた友恵が座って休んでいる修一を見て言った。

「修ちゃん。そんなくで休んじょったらいかんよ。ハミに噛まれるきに。早よう来いちゃ」

ハミはまむし蝮の事である。修一は慌てて立ち上がり周りを見た。友恵は修一の驚いた様子が可笑しくて笑っていた。やっと奥の院の入口の鳥居の処まで辿り着くと修一は二山も三山も越えたような気分で膝ががくがくしてきた。入口の鳥居の脇には清めの塩が備え付けてあり、

「もうちつとやきに頑張りよ」

曾祖母がそう言って二人に塩被いさせた。鳥居から奥は石段の処も

有り、今までの道程と比べると遙かに歩き安い道ではあった。しかし、祠に着いてから、今来た道を戻らなければならないのかと思うと修一は憂鬱になった。

「修ちゃん、大丈夫かね？」

友恵が心配して修一に言ったが、今の修一には答える気力すら無かった。友恵は修一とは同じ五年生にも関わらず体力的にも精神的にも遙かに上を行っていた。

奥の院の祠は意外と小さく両脇に烏天狗の石造があり祠の中は真暗で何も見えなかった。祠の前で曾祖母がお奉りを始め、友恵と修一は曾祖母の後ろで手を合わせていたが藪蚊が飛んできて修一は腕や足を数ヶ所刺され痒くてたまらなくなり、早くお奉りが終わってくれないかとばかり思っていた。曾祖母のお奉りが終わった時は正直ほっとした。

「おまんら祠の右から伝うて奥の方へ行てみいや」

友恵と修一は曾祖母の言うように祠の右奥へ回って行った。

「わあ、綺麗！」

友恵が驚いた。

「わあ、すごいなあ！」

修一も驚いた。眼下には雄大な土佐湾が広がり、東には安芸や室戸岬が見え、

西には足摺岬も見えているようであった。遥か下の海で漁をしている船が小

粒にしか見えなかった。友恵も修一もこのような素晴らしい景色を見たのは

生まれて初めてで、二人は身を乗り出し素晴らしい景色に見蕩れた。

「修ちゃん、綺麗ね。友恵、こんなが見た初めてちゃ」

「うん。すごいなあ」

「土佐湾が良く見えるちゃ」

「うん。良く見えるは」

「修ちゃん。ここから鯨が泳ぎゆうがは見えるろつかね」

「見えるかもしれんな。前、安芸の浜に鯨が上がった事があつたから」

「見えるろつかね。友恵、見たいちゃ。何処で泳ぎゆうろつか」

友恵と修一は目を凝らして鯨が泳いでいないか見渡した。

「おまんら、あまり身を乗り出したら危ないきに気を付けないかん

ぜよ」

二人が夢中になっているのを見て曾祖母が注意した。

「うん。分かつちゆう。修ちゃんも気を付けよ。落ちたら大事おほいごとやきに」

友恵がお姉さんのように修一に言った。

「うん。分かつてる」

「修ちゃん、鯨は見えんね」

「見えへんな。望遠鏡が有れば見えるかもしれんな」

修一はあの険しい山道を登ってきた疲れをすっかり忘れ、雄大な景色の虜になつていた。この素晴らしい景色は苦勞を重ね目地に辿り着いた者への褒美であるかのように思えた。

「ほいたら、ここでお弁当にするかね」

曾祖母が修一と友恵にお弁当を渡した。

三人はお堂の横から雄大な土佐湾を眺めながら宿で用意してくれたお弁当を

食べ始めた。竹の皮に包まれたお弁当の中身は梅干の入った海苔巻きのおに

ぎり沢庵だけで、質素であったが、この雄大な景色を眺めながら

食べると、

修一と友恵には今まで味わった事のないご馳走になった。

翌朝、曾祖母と、友恵、修一の三人は遍路宿を出て、高知のデパートの食堂

でホットケーキを食べてから安芸に帰った。

二十五、七夕飾り

青龍寺から帰った翌日の午前中、修一は家でゴロゴロしていた。
急激な運

動をした後のように足の筋肉が痛くて堪らなかった。

「修ちゃん、どうしたか？」

友恵が心配して訊くと、

「足の筋肉が痛い」

「友ちゃんは痛くないんか？」

「あては何ちゃあ痛とうない。普段から山道は慣れちゆうきに。学校やち毎

日山道を二キロばあ歩いて通いゆうがぜ」

修一は黒瀬に住んでいなくて良かったとつくづく思った。

「一日、ゴロゴロしゆうがかね」

「そつやないけど・・・」

「友恵は七夕飾りの用意をするき」

「七夕？」

修一は先日友恵が言っていた七夕の事をすっかり忘れていた。

「二十一日が本当の七夕さんよね。小父さんが竹笹を用意してくれるきに」

田舎はまだ旧暦で多くの行事を行う習慣になっていた。七夕の夜には天の川

が良く見えると言われているが都会の七夕は新暦の梅雨の時期で何時も曇り

か雨で天の川を見る事が殆ど無く、たとえ晴れていても煤煙で汚れた都会の

空は星の観測には縁がなかった。しかし、田舎は都会と違い空が澄み渡り、

夜は星が良く見えた。普段、修一は星など気にしていなかったがこの時は天

の川を見てみたいと思った。

「友ちゃんは七夕に天の川を見るんか？」

「うん。見るえ。とつても綺麗え。じつと見よったら流れ星も見えるがやき」

「流れ星？」

「うん。沢山見えるえ」

修一は、学校の行事で行く電気科学館のプラネタリウムでしか流れ星を見た

ことがなかった。

「修ちゃんに流れ星を見せちゃうきに。七夕に一緒に見よね」

「何処で見る？」

「浜に行たらええにかあらん。防波堤の上から見たらええやないろうか。あ

そこやったら空が良く見えるきに」

「うん、じゃあそつする」

「ほいたら、友恵は笹飾り作るきに。楽しみにしよつてよ」

間もなくして、武が修一を誘いにきた。

「修ちゃん、また川に行くが？足は痛^{いと}うないがかね」

友恵が驚いたように言うと、

「うん。もつお盆は過ぎたから。川に行っても怒られへんから。足は少し痛いけどな」

そう言つて、家を飛び出していった。修一はお盆が過ぎてからは釣りつんがけは欠かさなかった。

夕方、つんがけから帰つてくると奥の縁側で友恵が七夕の笹に飾り付けをし

ていた。丈の長い大きな笹で、笹には本物の茄子や胡瓜、袋に入れた米、お

菓子の入った袋、お餅などが吊るされていた。修一は幼稚園や小学

校の低学

年の時に笹飾りを作った事は有ったが、画用紙などに野菜や果物などを描い

てそれを切り抜いてぶら下げるだけであった。

「本物の野菜やお菓子をぶら下げるんか」

「修ちゃん、何言^いうが？ 毎年そ^うで」

「大阪では絵に描いた物を切り抜いてぶら下げるんや」

「本物やないと、天の神様、織姫様や彦星様に悪いやいか」

言われてみればそ^うであつた。

「短冊も用意しちゃうきに、修ちゃんも願^い事を書いてよ」

「うん。明日、書いてぶら下げる。何がええかな」

「友恵も短冊は明日書^くきに」

「友ちゃんは何を書く？」

「言われん。秘密やきに」

修一は翌日の午前中に短冊を書いて友恵に見られないように笹にぶら下げ、

そのまま急いで釣^りに行った。修一が釣^りから帰^ってくると、門の横に飾^り終^り

えた笹が既に立^ててあつた。

「修ちゃん、お小遣い上げて貰いたいが？」

友恵が訊いた。

「友ちゃん、他人ひとの短冊見たな」

「うん。少し見えたがよ。成績も上がるとええね。来年の春休みもきつと安芸に来れるきに」

友恵に全部見られていた。

「友ちゃんは何て書いたんや」

「秘密よね」

「明日、短冊見れば分かるは」

「友恵の短冊は封筒に入れてぶら提げちゃうきに、誰っちゃんあ読めんよ」

「そしたら、神様も読まれへんやんか」

「神様は封筒を開けてちゃんと読んでくれるきに。そして、友恵の願いはきつと叶えてくれるがやき」

友恵が短冊にどんな願い事を書いたのかは、最後まで修一には分からなかつ

た。

二十六、七夕の夜

二十一日の夜、夕食が終わり友恵と修一は浜に出掛けて行った。
防波堤の

上から見上げる夜空は満天の星空であった。潮の香りと繰り返す
こえる波

の音だけで、海は月明かりが映りキラキラ輝いていた。修一は毎年
田舎に帰

つて来ても夜空は大阪と比べて綺麗ぐらいにしか思っていないかつた
ので、今

日のようにしみじみと夜空を眺めると感動を覚えた。

「修ちゃん、あそこが天の川やきに」

「綺麗なあ。彦星と織姫は何処？」

「ええと・・・よく分からん」

「なんや。頼り無いな」

「別に、分からんざちかまんやいか」

「友ちゃん。勉強しときや」

「修ちゃんかて分からんがやに」

「そらそつちけど」

「修ちゃん、じいっと見よってよ。流れ星が見えるきに」

修一は目を凝らして星空を見た。

「あ！ 流れ星や」

「早いろつ。あつと言つ間やきに」

「あ！ またや」

「ぎよつさん見えるろつ」

「うん。流れ星見たん初めてや」

「黒瀬やち流れ星は良く見えるがで」

「この前、黒瀬で見たら良かったなあ」

「そうよね。修ちゃん言わんきに」

「流れ星なんて全然考えてへんかった」

友恵と修一は暫くの間、夏の終わりの天体ショーに見入った。

「修ちゃん。明日帰るがやね」

「うん。明日帰る」

「また、来いよ」

「うん。来年の春休みに帰って来たいと思ってる。春休みは宿題が

無いから
な。でも夏休みが一番ええな。川で泳げるし、釣りもつんがけも出
来るし」

「修ちゃんは川が好きやね」

「安芸の川は綺麗やから。こんな水の綺麗な川は何処にもあらへん」

「そやね。伊尾木川やち安芸川やち水が綺麗きにね」

「江湖川もええ。メダカもぎょうさん泳いでるし、蜆も獲れるし、
ハヤも釣
れるし」

「あなたのお婆さんが言いよった。修ちゃんは安芸に帰って来るな
り江湖川
でどっさり蜆を取ってきたて」

「小さいのが大分入ってたけど」

修一は友恵と共に田舎での夏休み最後の夜を満喫していた。

「修ちゃん。冷ひようなつて来たきにそろそろいぬるかね」

「うん」

友恵と修一は、二人並んで家に帰って行った。繰り返し打ち寄せる
波の音だ
けが修一の耳に聞こえていた。

二十七、別れの日

翌朝、いよいよ修一が大阪に帰る日がきた。家の前で祖父が自転車にリヤ

カーを繋ぎ修一と曾祖母の荷物を積み込んだ。武と武の祖母も見送りに玄関

先に出て来ていた。

「修ちゃん、また来いよ」

武が修一に言った。

「うん。武ちゃん。また来る」

「修ちゃん、また来なさいね」

武の祖母も言った。

「はい」

ミツちゃんの姿はやはりなかった。

友恵は武の自転車を借りて駅まで見送りに行くことにしていた。

「お祖母^{おば}ちゃんは駅まで行けんけんど、気を付けて帰りよ。曾祖母^{おばあ}さんも修ちゃん^{おや}の事頼みましたきに」

「ほいたら、行くきに。掴まっちよりよ」

祖父が自転車を漕ぎ始めた。

修一は、安芸に帰って来た時と同じ様に後ろ向きにリヤカーに座った。和食

屋分店からは、パンを焼く香ばしい匂いがし、江湖川の方からは蝉の鳴き声

が修一を見送るかのように聞こえてきた。祖父の自転車はリヤカーを引き見

慣れた通りを西に向って走って行った。砂利を採取する荷馬車も行き交って

いた。リヤカーからは見慣れた町並みが次第に遠くになっていった。駅に着くと電車は既にホームに停まり発車の時刻を待っていた。

「先に電車に乗って座って待ちよつたらええが」

そう言つて祖父は荷物を抱えて車内に運び入れた。曾祖母と修一は座席に座

り、ホームの祖父と友恵と話ながら発車の時刻を待った。

「修ちゃん、また来いよ。楽しみにしゅうきに」

祖父が笑顔で言った。

「うん。また来る」

「曾祖母さんも気を付けて行ってきてつかあさいね」

「あては大丈夫やきに」

「修ちゃん、栗送るきに。また休みになったら安芸^きに來いよ」

友恵は寂しそうな顔をした。

「うん。また来る。栗と絵楽しみにしてるから」

発車のベルが鳴り電車は走り始めた。

修一は祖父と友恵に手を振った。祖父もニコニコしながら手を振り
修一を見
送った。

「修ちゃん、また來いよ」

「修ちゃん、また來いよ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

友恵は何度も何度もそう言い、電車が見えなくなるまで手を振って
くれていた。

二十八、その後

あれから修一は中学、高校と休暇の時は故郷に帰る事は有ったが、東京の
大学に入り、卒業後に東京で就職すると忙しさに感^かめて殆ど帰る事はなかつた。

五十も半ばを過ぎた頃の八月の最終土曜日、偶々原宿表参道を通り掛ると“よさこいフェスティバル”が開催されていた。鳴子踊りに加え広場では物産の展示即売の店が並んでいた。NHK前のケヤキ並木通で繰り広げられる生バンドに合わせた各連のよさこい鳴子踊りを見ると、体の芯が急に熱くなり、気持ちが抑えられなくなった。九月に入ると直ぐに一週間の休暇を取り、久し振りに故郷の町を訪れた。当然の如く、あの頃とはすっかり町並みが変わってしまった。トロツコモ土佐電気鉄道の安芸線も既に廃線になり、国鉄の鉄道工事は途中で頓挫し、代わりに第三セクターで運営される土佐くろしお鉄道の“ごめん・なはり線”が町の北を走り、バイパスは国道五十五号線として町の北を貫き、国道沿いには役所、警察署、ホテル、旅館、遊技場、ショッピングセンタなどの新たな町並みが出来ている。昔

の本通り
は閑散として、当時の面影は既になく、廃業した店、国道沿いに移った店、
空地になったままの処も有る。

修一が生まれ、そして遊んだ家もコンクリートで固められた駐車場に変わり、
家の前の道も新たな安芸駅の開業に伴う拡張工事で広げられ、浜から新たな
安芸駅まで一直線にコンクリートの道が通されている。向かいに住んでいた
武は家庭の事情で家族と他県に移り、武の家は建て替えられ別の人が住み、
ミツチャンの家も今は無く、家族も居ない。和食屋分店は外装工事をしたも
の、今も営業を続けパンを焼く香ばしい匂いは子供の頃と同じだった。修
一が蛭を取った江湖川の川原はコンクリートの橋の下になってしま
い、川に
通じる細い道もなくなり、優雅に飛ぶ仏トンボも見事はない。メダカやハ
ヤの群れ泳ぐ姿に代わり放流された鯉だけが幅を利かせている。泳いだり、
つんがけをした安芸川も水量が減ると共に濁り、あの頃の流れは最早消え伏
せてしまっている。

黒瀬の水車小屋は取り壊され、吊橋は車が通れるコンクリートの橋に架け替
えられてた。しかし、友恵と遊んだ八坂神社、その横を流れ落ちる

湧き水と

伊尾木川の澄んだ流れ、青々とした山はあの頃と変る事なくそのままの姿で
いてくれた。

修一は東京に帰る前の日の夜、七夕の夜に友恵と星を眺めた防波堤の上に立
ち海を眺めた。打ち寄せる波の音を聞いていると、あの頃の楽しか
った事が
思い出され目頭が熱くなり涙が出て止まらなかった。皆、この町か
ら居なく
なってしまったが、懐かしい思い出は何時までも修一の心の中に有
った。

「曾祖母ちゃん、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、ミツチャン、武ち
ゃん、友
ちゃん。皆、素晴らしい夏休みの思い出をくれて有難う」

修一は海に向かって大きな声で叫び、皆に感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2840t/>

夏休み

2011年5月16日12時14分発行